多賀城市文化財調査報告書　第31集

高　崎　遺　跡

―第８次発掘調査報告書―

平成４年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

高　崎　遺　跡

—第８次発掘調査報告書—

序

本市に所在する多賀城跡をはじめとする多くの文化財は、後世に継承すべき貴重な文化遺産です。こうした文化財の存在をより具体的な形で紹介し、かつ整備復元することは、多賀城や東北の歴史に対する理解を深め文化財保護意識の高揚を図れるとともに、市民の方々が身近な文化財に対して誇りをもって生活できることにつながるものと考えています。

さて、当センターでは平成３年度も多くの箇所で発掘調査を実施し、それぞれ貴重な成果をあげるに至りました。その一つである高崎遺跡第８次調査におきましても、平安時代から近世にかけての人々の生活の跡を確認しました。中でも長期間にわたって利用されたことがわかった道路跡の存在は、そこを行きかった多くの人々の姿を現代の私たちに思い描かせてくれるものです。また建物跡や井戸跡等から構成される集落跡と、そこに住んだ人たちが耕作したであろう水田跡の発見は、国府多賀城の周辺地域における集落のあり方を解明するのに大きな手がかりをあたえるものと考えています。

こうして多くの成果をあげることができましたのも、発掘調査の実施を快諾され、種々御協力を賜りました三菱石油株式会社東北支店をはじめとする関係者の皆様のおかげと感謝いたしております。

なお、本報告書が文化財関係者のみならず、多少なりとも一般の方々に活用していただければ幸いです。

平成４年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所　長　斎　藤　一　司

例　言

1．　本書は、三菱石油株式会社東北支店によるガソリンスタンド建設に先立って行った高崎遺跡第８次調査の成果をまとめたものである。

2．　本書の執筆・編集は、当センター職員の協力を得て、石本　敬、相沢清利が担当した。

3．　本書の作成にあたっては、佐藤悦子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子、大山真由美、福原弥子、佐藤祐子の協力を得た。

4．　本書中における各遺構の略号は次の通りである。

　ＳＢ＝掘立柱建物跡、ＳＤ＝溝跡、ＳＥ＝井戸跡、ＳＫ＝土壙、ＳＸ＝道路跡・水田跡

5．　遺構は、発見順に301番からの一連番号を付した。

6．　調査区の平面図実測基準線は、国家座標の方位をとっている。また、本書挿入の断面図実測基準線は標高値を示している。

7．　土色については、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄：1976）を参照した。

8．　プラント・オパール分析は、有限会社古環境研究所（埼玉県大宮市所在）に依頼し、その結果を付章として掲載した。

9．　調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが一括保存している。

調　査　要　項

1．　遺 跡 名　高崎遺跡（宮城県遺跡登録番号18018）

2．　調 査 地　宮城県多賀城市高崎二丁目86－1他

3．　調査面積　約400㎡（対象面積1,230㎡）

4．　調査期間　平成3年4月22日～7月26日

5．　調査主体　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井　茂男

6．　調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター

所　長　斎藤　一司

主　査　赤坂　みゑ子

研究員　滝口　卓、石川俊英、千葉孝弥、石本　敬、相沢清利

7．　調査協力者　三菱石油株式会社東北支店、日建工業株式会社仙台支店

8．　調査参加者　赤間かつ子、阿部敏子、阿部美津子、遠藤一代、小笠原マキ子、菅野恵子、小野寺恵子、加藤昭一、加藤文一、菊地みち子、熊谷好子、佐々木四郎、境　幸子、鈴木一郎、鈴木真佐雄、武山あや子、千葉享一、百々みち子、松本享一、平山節子、渡辺園恵、秋月弘子

本 文 目 次

序　文
例　言
調査要項

Ⅰ　高崎遺跡の立地と歴史的環境 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 5
Ⅲ　調査方法と経過 …… 6
Ⅳ　調査成果
　1．基本層位 …… 7
　2．発見遺構と遺物 …… 8
　（1）　掘立柱建物跡 …… 8
　（2）　道　路　跡 …… 12
　（3）　溝　　跡 …… 17
　（4）　井　戸　跡 …… 20
　（5）　土　　壙 …… 21
　（6）　水　田　跡 …… 23
Ⅴ　まとめ …… 25
Ⅵ　高崎遺跡第８次調査におけるプラント・オパール分析 …… 29

写真図版 …… 31

Ⅰ　高崎遺跡の立地と歴史的環境

高崎遺跡は、多賀城市のほぼ中央に位置し、留ヶ谷、高崎両地区を中心とする東西約1.2km、南北約１kmの広範囲にわたる遺跡である。遺跡が立地する低丘陵は鮮新世の凝灰岩を基盤とした松島丘陵（標高50～60m）から派生したもので、塩釜市、利府町、多賀城市北部にまたがり標高20～50mを計る。この付近の低丘陵は、大きくＶ字状に開く谷をつつむ形をなし、いずれも溺れ谷地形を示しており、大小の谷間が複雑に入り込んでいる。本遺跡はこのような低丘陵（この付近一帯の丘陵については、通称高崎丘陵と呼んでいる。）の南端に位置しており、今回の調査地点は、標高4.5～5.5mを計る丘陵の南西斜面部にあたる。

この高崎丘陵一帯には旧石器時代から江戸時代におよぶ遺跡が多く分布している。本遺跡の南方約0.2kmの地点には約10万年前と推定される旧石器時代の志引遺跡、本調査地点北側に隣接して丸山囲古墳群、東方0.8kmの東北学院大学工学部敷地内には稲荷殿古墳が分布している。また遺跡の中央部には特別史跡多賀城跡附寺跡の一部多賀城廃寺が所在している。さらに、この付近一帯は数多くの板碑が存在していることでも知られている。中世の館跡とみられている遺跡としては東田中窪前遺跡、志引遺跡、桜井館跡がある。江戸時代の遺跡としては、本遺跡の東端に接する留ヶ谷遺跡がある。留ヶ谷遺跡は従来高崎遺跡の中に包括されていたが、昭和59年本市教育委員会の試掘調査の結果、土塁とそれに伴う空掘を発見し、「留ヶ谷館跡」として登録された。しかし、その後の第１・２次調査の成果を検討した結果、館跡としての遺構もみられるが、古代から近世に及ぶ複合遺跡として「留ヶ谷遺跡」とした方が適切であるとの結論に達し改称している。近世の遺構としては土塁、空掘、掘立柱建物跡、井戸跡などが検出されており、上層階級である武士の屋敷跡と考えられている（註１）。

次に、これまでに実施された本遺跡における発掘調査についてみると、本市教育委員会によって昭和55年からこれまで第１次～第７次にわたる調査を行っている。昭和55・56年の第１～２次調査では、多賀城廃寺跡西方の弥勒地区の丘陵部から低湿地にかけての遺構確認調査を実施した。この調査で丘陵上から古代の掘立柱建物跡、土壙、合口甕棺墓１基を検出した。その後、昭和63年に同地区の本調査（第７次）を行い、一辺１mを計る柱穴を持つ古代の大規模な掘立柱建物跡を２棟発見した。このうち全体の規模が判明したＳＢ201建物跡は、桁行４間、梁行２間の南北棟で、柱痕跡は最大径28cmを計る。この他、近世の掘立柱建物跡10棟、溝跡10条、土壙９基を発見した。出土遺物から江戸時代後期の屋敷跡と考えられる。昭和57年の第３次調査（表地区）では、古代の溝跡、土壙、埋甕１基を検出した。昭和60・61年には今回の調査区北側に隣接する第５・６次調査（井戸尻地区）を実施し古代の掘立建物跡６棟、柱列跡３条、竪穴住居跡７軒、井戸跡１基を発見した。また、中世頃のものとしては、溝跡、井戸跡、土壙を

検出している。特にB地区で発見した丘陵腹部を巡っている溝跡は、出土した青磁碗から13～14世紀のものと考えており、この丘陵上に見られる土塁状の高まりや、平場の存在と併せて、館を構成していたものと推察される。

この他に発掘調査による出土ではないが、本調査区東方約150mの今村邸内からは、昭和47年に土師器と須恵系土器の杯が重なった状態で約640点発見されている。この杯の内面には油煙状の付着物がその大半にみられ、灯明皿として使用したものと考えられている。そして、一括廃棄の状況や、付着物の検討から国府管轄で執り行われた「万燈会」などに関わる儀式の可能性が指摘されている（註２）。

調査年次	調査地区	おもな遺構		おもな出土遺物	備考
		検出遺構	年代		
昭和41年	丸山地区	井戸跡、建物跡	奈良・平安時代	土師器、須恵器、木製品	（註３）
第１次調査（昭和55年）	弥勒地区	掘立柱建設跡、土壙、合口甕棺	平安時代	土師器、須恵器、木製品	中央公園計画関連調査（註４）
第２次調査（昭和56年）	弥勒地区			土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦	中央公園計画関連調査（註５）
第３次調査（昭和57年）	表地区	溝跡、土壙、甕棺（甕棺）	平安時代	土師器、須恵器	市営住宅建設工事関連調査（註６）
第４次調査（昭和60年）	坂下地区	柱列跡、溝跡、土壙	平安時代	土師器、須恵器、瓦、風字硯	宅地造成工事関連調査
第５次調査（昭和60年）	井戸尻地区	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、柱列跡、溝跡、井戸跡、土壙	平安時代	土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、円面硯、石製品	都市計画街路建設工事関連調査（註７）
第６次調査（昭和61年）	井戸尻地区	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、柱列跡、溝跡、合口甕棺、土壙	平安時代～中世	土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、硯、砥石、青磁、古銭、円盤状土製品	都市計画街路建設工事関連調査（註８）
第７次調査（昭和63年）	弥勒地区	掘立柱建物跡、溝跡、土壙、合口甕棺	平安時代～近世	土師器、陶磁器、カワラケ、古銭	中央公園建設関連調査（註９）

第１表　高崎遺跡調査一覧表

【註】

註１　多賀城市教育委員会「年報１」多賀城市文化財調査報告書第１集（1987）

註２　多賀城市「多賀城市史　第４巻　考古資料」（1992）

註３　加藤孝他「多賀城町高崎古代井戸跡調査概報」（1967）

註４　多賀城市教育委員会「山王・高崎遺跡発掘調査概報」多賀城市文化財調査報告集　第２集（1981）

註５　多賀城市教育委員会「高崎・市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書　第３集（1982）

註６　多賀城市教育委員会「多賀城周辺の遺跡展」（1986）

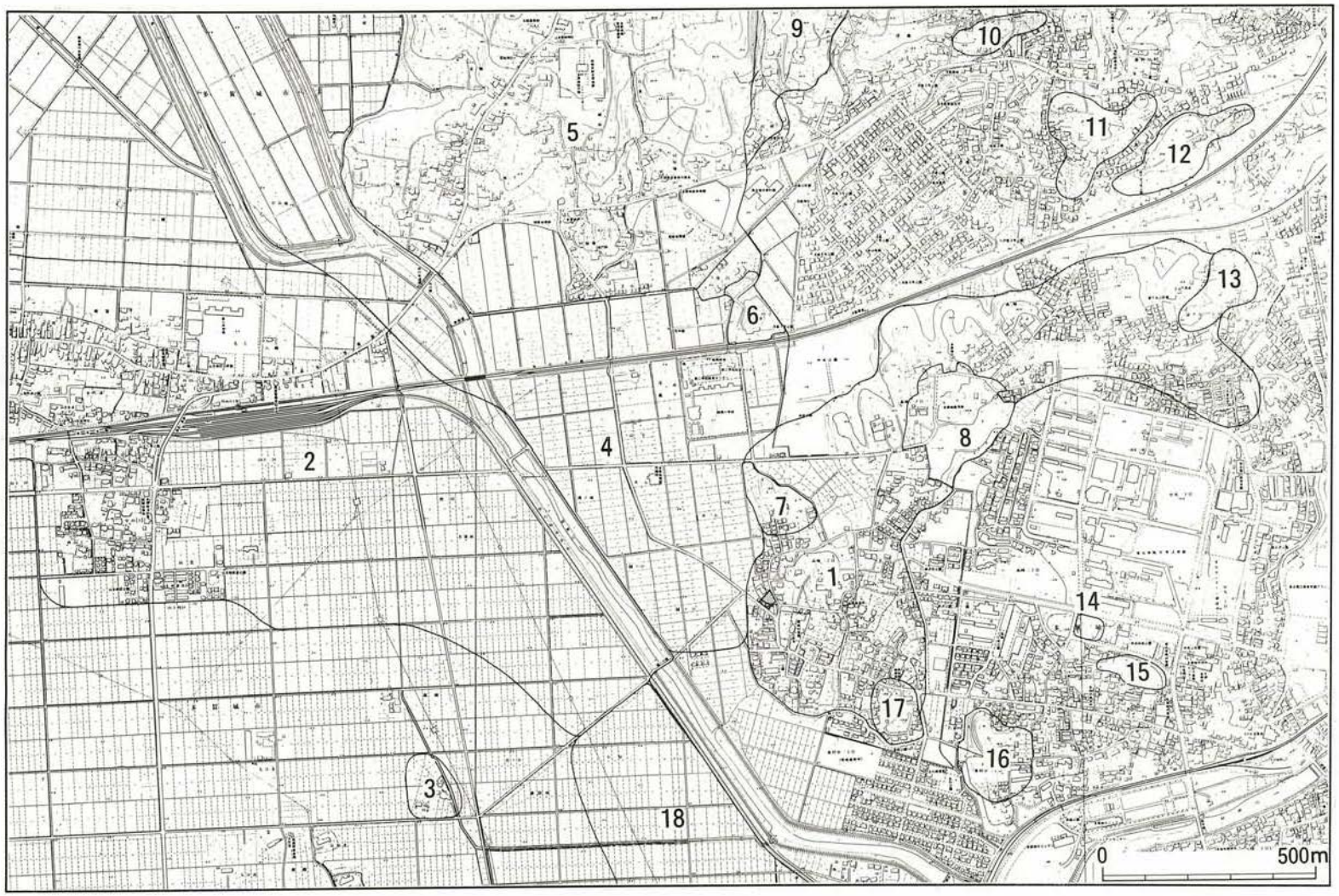
註７　多賀城市教育委員会「高崎遺跡」多賀城市文化財調査報告書　第11集（1986）

註８　多賀城市教育委員会「高崎遺跡」多賀城市文化財調査報告書　第12集（1987）

註９　註２に同じ

図中番号	調　査　年　次	調査地区	図中番号	調　査　年　次	調査地区
①	第１次調査(昭和55年)	弥 勒 地区	⑤	第５次調査(昭和60年)	井戸尻地区
②	第２次調査(昭和56年)	弥 勒 地区	⑥	第６次調査(昭和61年)	井戸尻地区
③	第３次調査(昭和57年)	表　地区	⑦	第７次調査(昭和63年)	弥 勒 地区
④	第４次調査(昭和60年)	坂 下 地区	⑧	第８次調査(平成３年)	井戸尻地区

第１図　調査区位置図



第２図　遺跡分布図

第２表　遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	高崎遺跡	集落跡・館跡	奈良・平安・中世	10	高原遺跡	散布地	奈良・平安
2	山王遺跡	集落跡	古墳～近世	11	小沢原遺跡	散布地	奈良・平安
3	大日北遺跡	散布地	奈良・平安	12	野田遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
4	市川橋遺跡	集落跡・水田跡	奈良・平安	13	留ヶ谷遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・近世
5	特別史跡 多賀城跡	国府跡	奈良・平安・中世	14	鍬井館跡	館跡	中世
6	館前遺跡	官衙・館跡	平安・中世	15	稲荷殿古墳	高塚古墳(円)	古墳(後)
7	丸山囲古墳群	高塚古墳(円)	古墳	16	志引遺跡	包含地・館跡	旧石器・奈良～中世
8	特別史跡 多賀城廃寺跡	寺院跡	奈良・平安	17	東田中窪前遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
9	西沢遺跡	散布地	奈良・平安	18	六貫田遺跡	散布地	奈良・平安

Ⅱ　調査に至る経緯

多賀城市では、近年本市自体の都市化や隣接する仙台市からの住宅需要の高まりによって、市街地の拡大が急速に進んでいる。この傾向は、本市西部地区において顕著であり、本遺跡が所在する高崎地区でも宅地開発や幹線道路の整備など、新たな土地利用が徐々に進んでいる現状にある。

一方、本市の西部地区と呼ばれる新田・山王・市川・高崎などの各地区は、古墳時代以降連綿と人々の生活が営まれた地域であり、比較的良好な状態で遺構・遺物が残されている。さらに、奈良時代以降は陸奥国府の所在地として、長く東北の中心拠点の一つとして栄えたという歴史が示すように、現在市内で確認されている埋蔵文化財包蔵地の約７割が、この地域に集中している。しかも個々の包蔵地自体が、他に例を見ないほど広い範囲に占地し、これらが隣接して分布する状況にある。このため、当地域で発生する開発計画の大部分が包蔵地にかかることになり、事前調査の対象となっている。

本市では、このような開発の動きに対し昭和54年度から独自に発掘調査を実施し、その後も調査体制の充実を図っているが、近年開発件数の著しい増加によって、すみやかな対応ができない状況になりつつある。また、都市整備の立場からみても、無秩序な開発は都市景観を損なう一因にもなり、ひいては本市のめざす歴史的資源を生かしたまちづくりにも影響を及ぼすおそれもでてきている。したがって、将来的な展望をもった対処のしかたを多方面から検討する必要が早急に求められる地域でもある。

さて本調査については、高崎遺跡の範囲の南西部に位置する高崎二丁目地内におけるガソリンスタンド建設計画が、その契機になっている。これについての協議は、平成２年７月に地権者より提示されている。当該地は、国府の附属寺院であった多賀城廃寺を取り巻く古代から中世にかけての集落跡及び館跡内に位置し、さらに隣接地においては昭和61年に都市計画街路建設に伴う発掘調査が実施され、掘立柱建物跡、溝跡、土壙などが発見されている。これらのこ

とから、遺構の延長が当該地にもおよんでいることが、ほぼ確実なものと判断され、地権者に対してその旨を回答し、併せて事前の発掘調査の協力を依頼した。その後調査の承諾を受けたことから、平成3年4月5日付けで地権者との委託契約を締結し、4月22日から野外調査を実施したものである。

Ⅲ 調査方法と経過

今回の調査は、調査対象地域のうちガソリンスタンドに伴う地下タンクと建物が設置され、遺構面に影響を及ぼすおそれのある北半部に調査区を設定した。なお、調査対象面積は1,230㎡で、このうち約400㎡を調査した。また、これ以前に行ったボーリング調査によって、調査区内では遺構確認面と予想される地山の上に1.5～2mの厚さで盛土がされていることが確認できた。工事に際しては、現在の地表面を利用するという計画であったため、南半部については遺構への影響がないものと判断し、現場事務所と廃土の場所に使用した。

調査における発掘基準線は、調査区中央付近に設定した原点（SN00、EW00）を通る真北方面の軸線を南北基準線とし、それと直交する東西方向の軸線を東西基準線とした。そして、原点を中心にして調査区内に3mの方眼を組み、南北方向は北をN、南をSとして原点から1m離れる毎にアラビア数字でN01、N02、N03……、S01、S02、S03……と表わした。東西方向は原点から東をE、西をWとして同様に表わした。原点の国家座標はX＝－189,525m、Y＝14,260mである。

また、遺構番号については、本遺跡内にこれまでに実施された各調査における全ての発見遺構に一連の番号をつけていることから、今回の調査では301番から発見順に番号をつけた。

発掘調査は、平成3年4月22日から開始した。当該地は最近まで宅地として利用されていたため、西側へ傾斜する旧地形の上に厚く盛土をして整地していたことから、調査に先だって重機による掘り下げを行った。調査はまず遺構確認面を覆う第Ⅰ層の除去を行う（5月10日）。その結果、調査区の東側、中央付近、西側の三箇所に、溝跡を中心とする遺構のまとまりを確認した。このうち、東側で検出した各溝跡は全て東西方向に延びるもので、N03ライン付近をはさんで、その北側と南側の位置する2つのグループに分かれる。さらに、相方とも各溝跡がほぼ同一位置で重複するものである。このことから、これらは道路の両側に取り付く側溝になるとみなした。重複関係や規模、埋土の類似性から、新しい順にSD301溝跡とSD302溝跡、SD343溝跡とSD344溝跡、SD311溝跡とSD312溝跡、SD322溝跡とSD323溝跡がそれぞれ対になるものと判断した（5月22日）。さらに、整地層をはさんだ下層においても同様にSD327溝跡とSD328溝跡、SD329溝跡とSD330溝跡が検出され、この位置で6時期の道路の変遷を確認した（6月3日）。 なお、これらの道路跡は新しい時期になるにつれて、少しづつ道路幅

を縮小している。一方、調査区中央付近では溝跡と土壙を検出したが、東側に比べ遺構の分布密度は薄くなっている。この箇所での遺構の確認面は、第Ⅱ層上面と地山面であるが、第Ⅱ層は調査区のさらに北側に延びる谷状の落ち込みに堆積した土層であることを確認した（6月5日）。また、調査区西側では東西方向に斜行するＳＤ306～309溝跡の調査を終了した後、これらの確認面である第Ⅲ層の範囲確認を行った（6月7日）。この段階で、調査区中央寄りで一辺5.5～6.5mの方形プランを確認した。そこで、この箇所の堆積土を土壌分析したところ多量のプラントオパールが検出されたことから、水田跡であるとの確証が得られた。調査は、その後東側における整地層の下で検出された掘立柱建物跡と井戸跡の調査を行う（6月28日）。7月に入ると連日の降雨に悩まされたが、その合間をぬって主に小柱穴等の断ち割りや補足調査を行う。ついで、実測図作成や調査区全体の写真撮影を行い、7月26日をもって野外調査の全てを終了した。

Ⅳ 調 査 成 果

1．基本層位

本調査区の現状は、旧地形の上に約2ｍ盛土し、平坦な地形に造成している。調査の結果、調査区の位置は高崎地区の低丘陵が沖積地の下に落ち込む付近にあたり、西側にゆるやかに傾斜する旧地形を呈していたことを確認した。この旧地形を覆う堆積土は、厚さ20～30cmで以下の4層に大きく分けられる。

第Ⅰ層　黒色（5Y2/1）～灰色（5Y4/1）シルト。すべての遺構を覆うしまりの弱い土層を第Ⅰ層としてとらえたが、堆積場所によって色調や土性に違いがみられる。調査区東側では色調が濃いが、西側に行くにしたがって徐々に灰色や粘性が強くなる傾向にある。

第Ⅱ層　黒色（2.5Y2/1）粘土質シルト。調査区中央付近の北側に分布する。調査区外の北西側に延びるゆるやかな谷状部分に堆積した土層である。この地区で検出した遺構のうち、ＳＤ330溝跡以外はすべてこの上面より掘り込まれている。遺物は、土師器と須恵器の小破片が出土している。

第Ⅲ層　黄灰色（2.5Y4/1）シルト。調査区西側に5～15cmの厚さで堆積する。調査区西壁際になるにしたがって砂質気味になり、灰白色火山灰を斑状及び小ブロック状に含むようになる。また、この付近で検出した遺構は溝跡のみであるが、この層の上面で確認したものと、これに覆われるものとがある。遺物は、土師器杯・蓋・甕、須恵器杯・双耳杯・蓋・瓶、赤焼き土器杯が出土している。なお、本調査の後に実施した北西側に約100m離れた樋ノ口地区の試掘調査でも、低湿地に堆積した同様の土層を確認している。

第Ⅳ層　灰色（5Y4/1）砂質シルト。第Ⅱ層の分布とほぼ重なり、谷状の落ち込みに向かっ

て南東側から流れ落ちた土砂が堆積した様相を示す。この層の下面で検出した遺構は皆無であり、礫を含んだ地山のローム層の直上に堆積している。遺物は出土していない。

上記の堆積土のほかに、調査区東半部で整地層を確認している。

整地層ａ　黄灰色（2.5Y4/1）シルト。調査区南東部の道路跡が重複する箇所を中心に分布する。しまりが強く，地山土を斑状及びブロック状に多く含む。厚さは15～20cmである。ＳＸ350Ａ～Ｄ道路跡の４時期がこの上面より掘り込まれており、一方ＳＸ350Ｅ・Ｆ道路跡の２時期がこの層に覆われている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、手づくね土器、石鏃が出土している。このうち、土師器はロクロ調整と非ロクロ調整のものが混在している。

整地層ｂ　にぶい黄橙色（10YR7/3）シルト。調査区南東部のごく一部の範囲で認められた土層で、整地層ａの下層に位置する。道路跡との関係は、ＳＸ350Ｅ道路跡がこの上面より掘り込まれているのに対して、ＳＸ350Ｆ道路跡はこの層に覆われている。遺物は、土師器と須恵器の小破片がわずかに出土しているにすぎない。

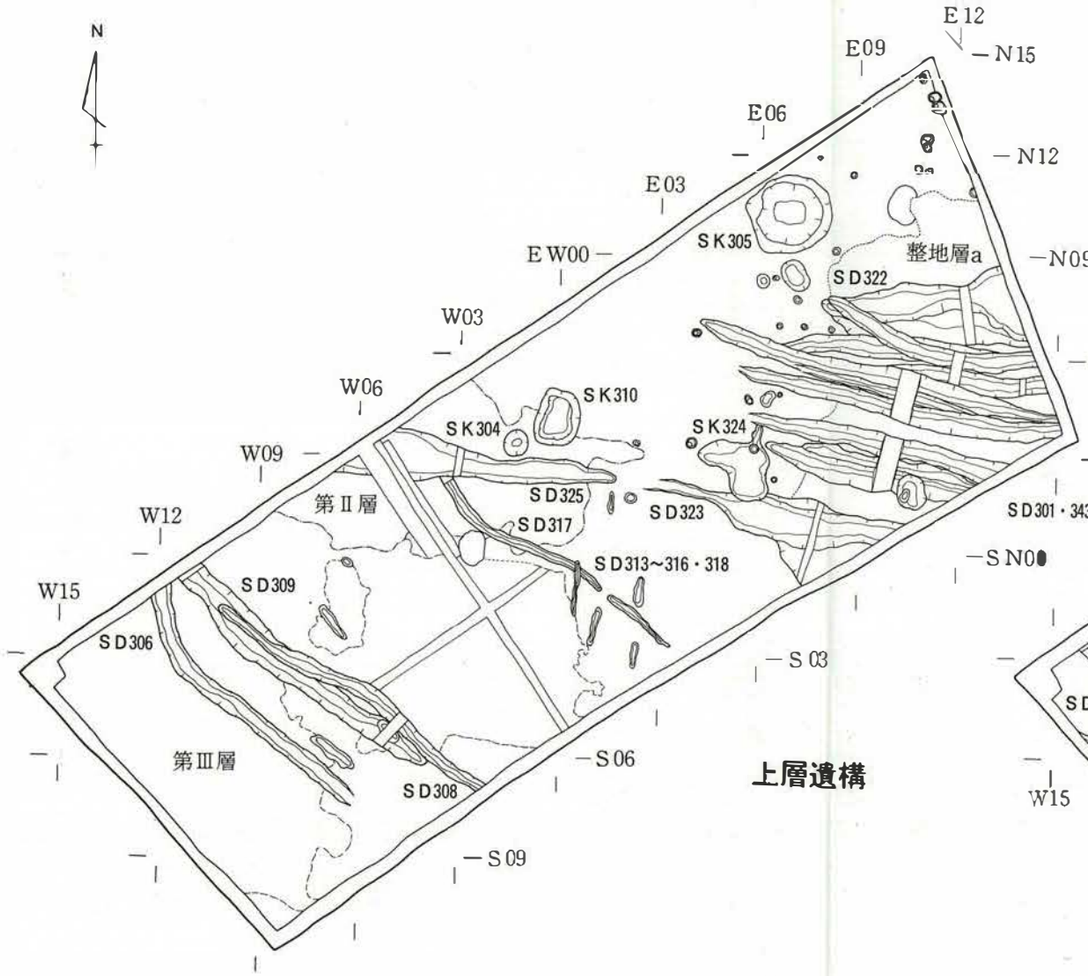
２．発見遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、掘立柱建物跡３棟、道路跡１条、溝跡23条、井戸跡１基、土壙8基、水田跡、小柱穴等である。これらの分布状況をみると、調査区東側では整地層をはさんで掘立柱建物跡、道路跡、井戸跡等が比較的濃密に分布する。一方、中央部から西側にかけては溝跡、土壙、水田跡がみられ、特に溝跡の検出数が多い。なお、この箇所では建物跡等の存在を推測させる柱穴類はほとんどみられない。

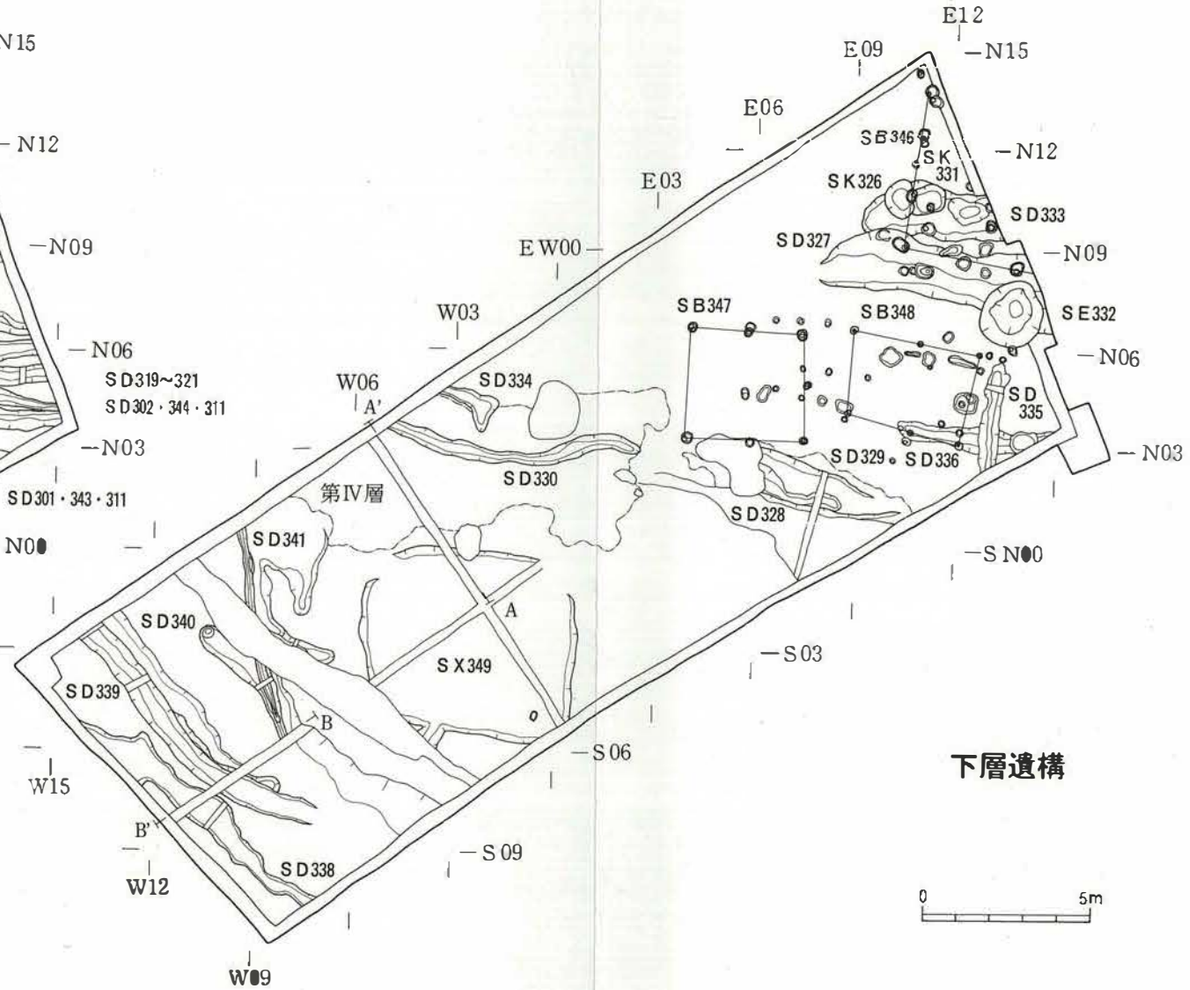
遺物は、土師器、須恵器の出土量が多く、赤焼き土器と瓦がこれに次ぐ。このほか中世の無釉陶器、近世以降の陶磁器、石鏃、砥石等が若干出土している。調査全体での出土量は、平箱８箱分とさほど多いとはいえず、個々の資料も全体の形態のわかるものは少ない。遺構出土の遺物については、溝跡と土壙からの出土量がやや多い傾向にある。

(1)　掘立柱建物跡

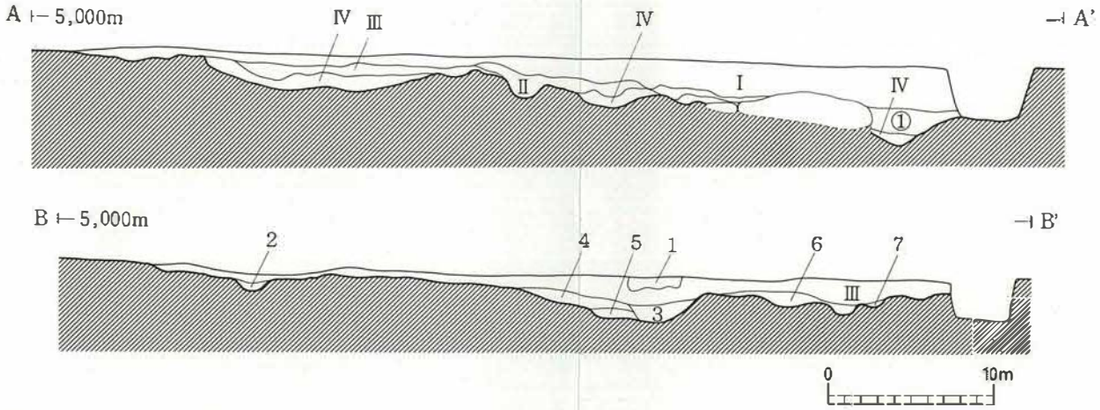
〔ＳＢ346建物跡〕　調査区北東隅の地山上面で検出した建物跡で、整地層ａに覆われる。重複関係から道路跡で一番古い時期のＳＸ350Ｆ道路跡よりも古い。東西２間以上、南北は３間もしくはそれ以上で、全体の半分以上は調査区外にかかると思われる。方向は、南側柱列でみると東で11度30分南に偏している。柱間は、南側柱列で西から1.8m・1.6m、西側柱列で南から1.6m・1.75m・1.3mを計る。柱穴掘り方は、方形もしくは長方形を呈し、一辺35～55cmを計る。確認面からの深さは、30～35cmでほぼ一様であるが、南西隅柱穴のみ約60cmと著しく深くなっている。柱痕跡は径約14cmの円形で柱材が残存しているものもある。なお、南側柱列の西から１間目の柱穴では、断面観察の結果柱の抜き取りがあったと思われ、底面付近で柱痕跡を確認している。埋土は、柱痕跡が黒褐色シルトで、底面付近程粘性が強くなる。掘り方は黄褐色を



上層遺構



下層遺構



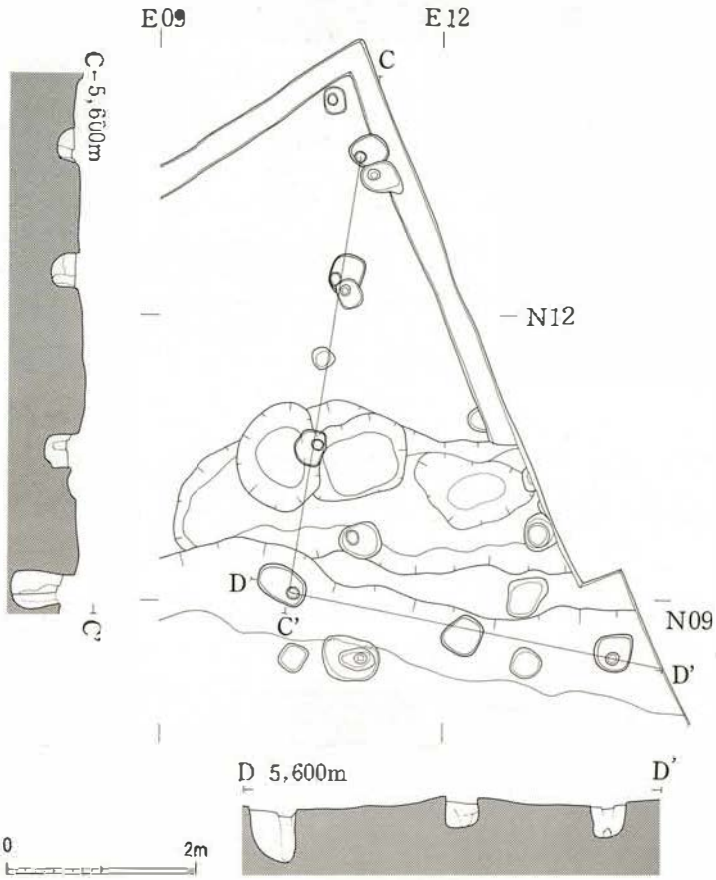
土層観察表

層位	堆積層位・遺構	土色	土性	備考
Ⅰ	堆積層 第Ⅰ層	黒色 (5Y2/1)	シルト	
Ⅱ	〃 第Ⅱ層	〃 (2.5Y2/1)	粘土質シルト	
Ⅲ	〃 第Ⅲ層	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	
Ⅳ	〃 第Ⅳ層	灰色 (5Y4/1)	〃	
①	SD325	黒褐色 (2.5Y3/1)	〃	地山粒を含む
1	堆積層(第Ⅲ層)	灰色 (5Y4/1)	〃	灰白色火山灰を多く含む
2	SD341	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	〃	やや砂質
3	SD339A	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂質シルト	地山土を含む,第Ⅲ層に類似
4	SD339B	黄褐色 (10YR5/6)	〃	粗い砂を含む
5	〃	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	〃	〃
6	SD338	黄灰色 (2.5Y4/1)	〃	土層全体が酸化
7	〃	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	〃	〃

第3図　遺構配置図・セクション図

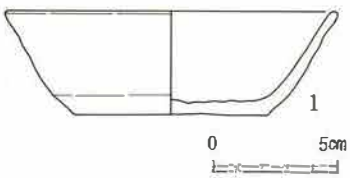
基調としたシルトで、地山土や黒色土を斑状に含む。遺物は出土していない。

〔ＳＢ347建物跡〕 調査区東半部で検出した東西２間、南北２間の建物跡である。大部分が地山上面での確認であるが、南東隅柱穴のみ整地層ａの上面で確認している。さらに、重複関係からＳＸ350C道路跡より古く、ＳＤ321溝跡とＳＫ324土壙より新しい。方向は、北側柱列でみると東で３度30分南に偏している。柱間は、北側柱列で西から1.75ｍ・1.6ｍで総長3.35ｍ、東側柱列で北から1.5ｍ・1.7ｍで総長3.20ｍを計る。なお、西側柱列中央の柱穴は確認できなかった。柱穴掘り方は円形を呈し、径20～25cm、深さは確認面から25～40cmを計る。埋土は黄灰色シルトで、地山粒を多量に含む。柱痕跡は径約12cmの円形で、埋土は黒色粘土質シルトである。遺物は、南東隅柱穴の掘り方から須恵器杯（第５図１）が出土している。



第４図　ＳＢ346建物跡実測図

〔ＳＢ348建物跡〕 調査区南東部で検出した東西２間、南北１間の東西棟である。整地層ａの下面での確認であり、さらに重複関係からＳＤ336溝跡より古い。方向は、北側柱列でみると東で９度南に偏している。柱間は、北側柱列で西から2.0ｍ・1.8ｍで総長3.8ｍ、東側柱列で2.65ｍを計る。柱穴掘り方は円形を呈し、径18～25cm、深



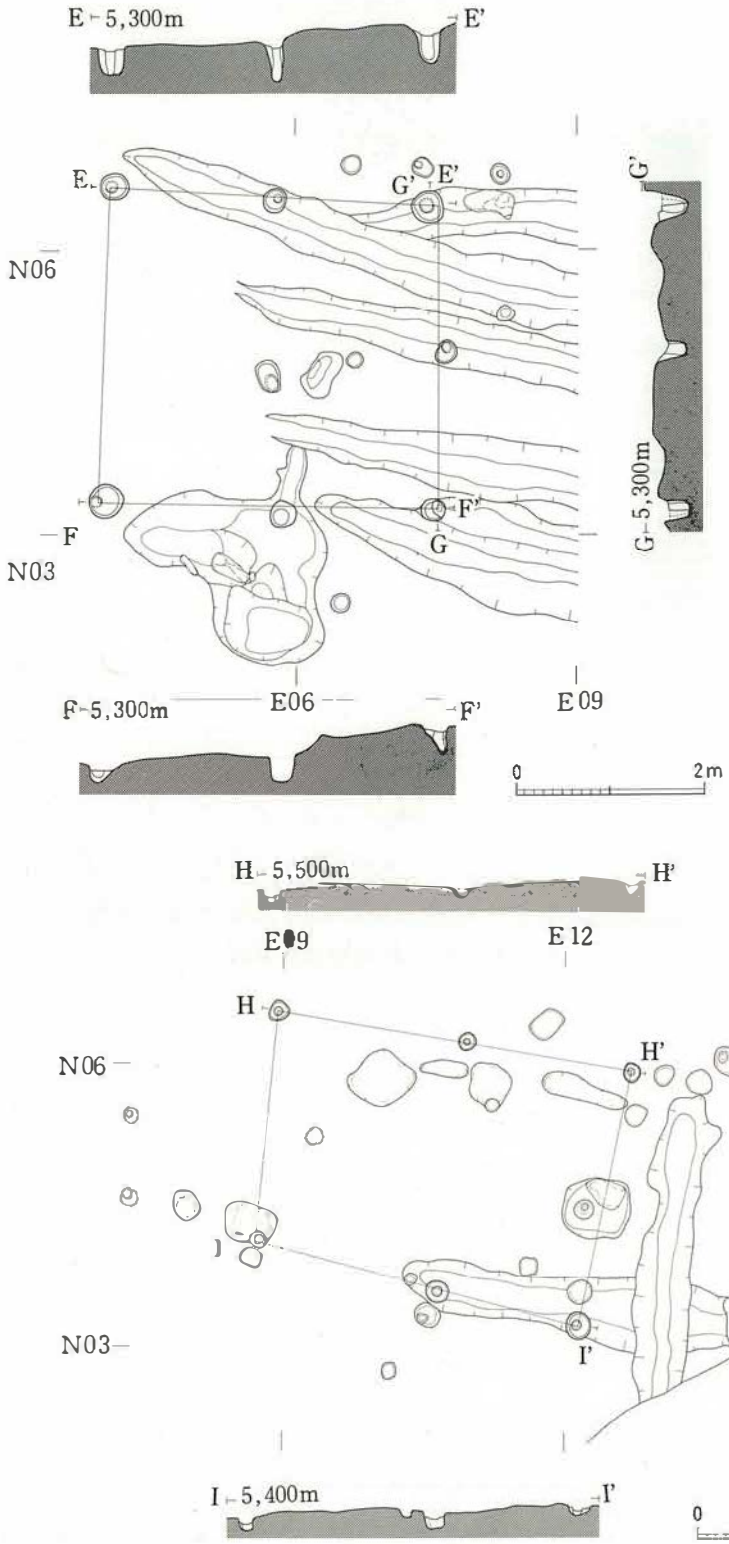
No	種別	器種	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	図版No.	備考
1	須恵器	杯	ロクロナデ，底部 手持ヘラケズリ	ロクロナデ	(13.4)	7.8	4.2	6－1	

第５図　ＳＢ347建物跡出土遺物

さは確認面から15～20cmである。埋土は黄褐色を基調としたシルトで、地山粒を含む。柱痕跡は径約10cmの円形で、埋土は黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

(2) 道路跡

〔S X350道路跡〕 調査区南東部で検出した東西方向に走る道路跡である。整地層をはさんで6時期の変遷が認められ、新しい順にA期～F期とした。それぞれ南北両側に側溝を伴っており、新しい時期になるにしたがって路幅が狭くなる傾

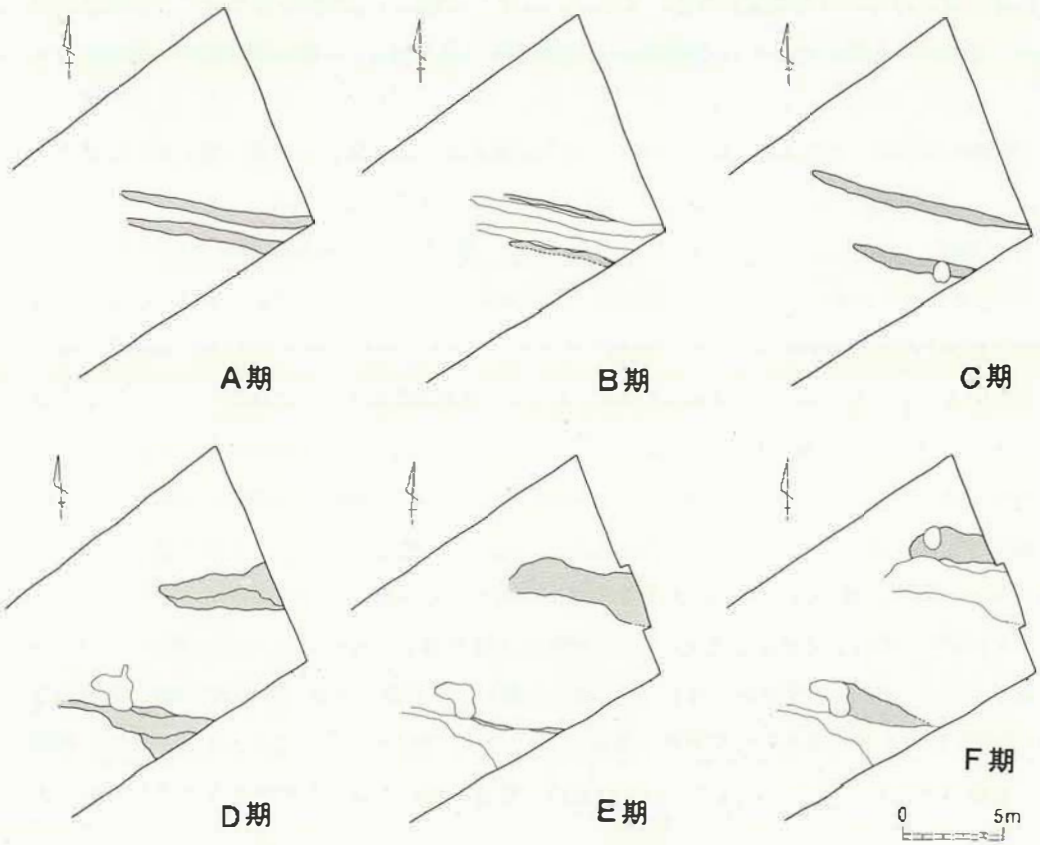


第6図　S B347・348建物跡実測図

向にある。また、方向は各時期を通して必ずしも一致するものではないが、東側で南にやや偏する点で共通しており、傾きは５度～15度の範囲内におさまる。

ＳＸ350Ａ　整地層ａの上面で検出したもので、側溝は南側がＳＤ301溝跡、北側がＳＤ302溝跡である。路幅は両側溝の心心で計ると約1.35ｍである。長さは調査区内では約10ｍを計り、さらに東側に延びていく状況を示している。両側溝の断面形は舟底状を呈しており、最深部がやや内側に寄っている。規模は上幅60～80㎝、下幅15～20㎝、深さ10～15㎝を計る。埋土は、しまりの弱い灰色砂質シルトである。遺物は、両側溝から土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・瓶が出土している。また、南側側溝から近世もしくはそれ以降の時期の陶器片と染付の磁器片が出土している。

ＳＸ350Ｂ　調査当初はＳＸ350Ｃの側溝と合わせて掘り込んだものであるが、底面から壁にかけての状況や断面観察の結果、Ａ期とＣ期の中間に位置する道路跡であると判断した。側溝は南側がＳＤ343溝跡、北側がＳＤ344溝跡である。路幅は両側溝の心心で計ると約2.25ｍである。両側溝の断面形は舟底状を呈し、規模は上幅が断面でみると25～30㎝、下幅10～15㎝、深さ約20㎝を計る。埋土は、地山粒を含んだ灰色砂質シルトで、Ａ期同様しまりは弱い。



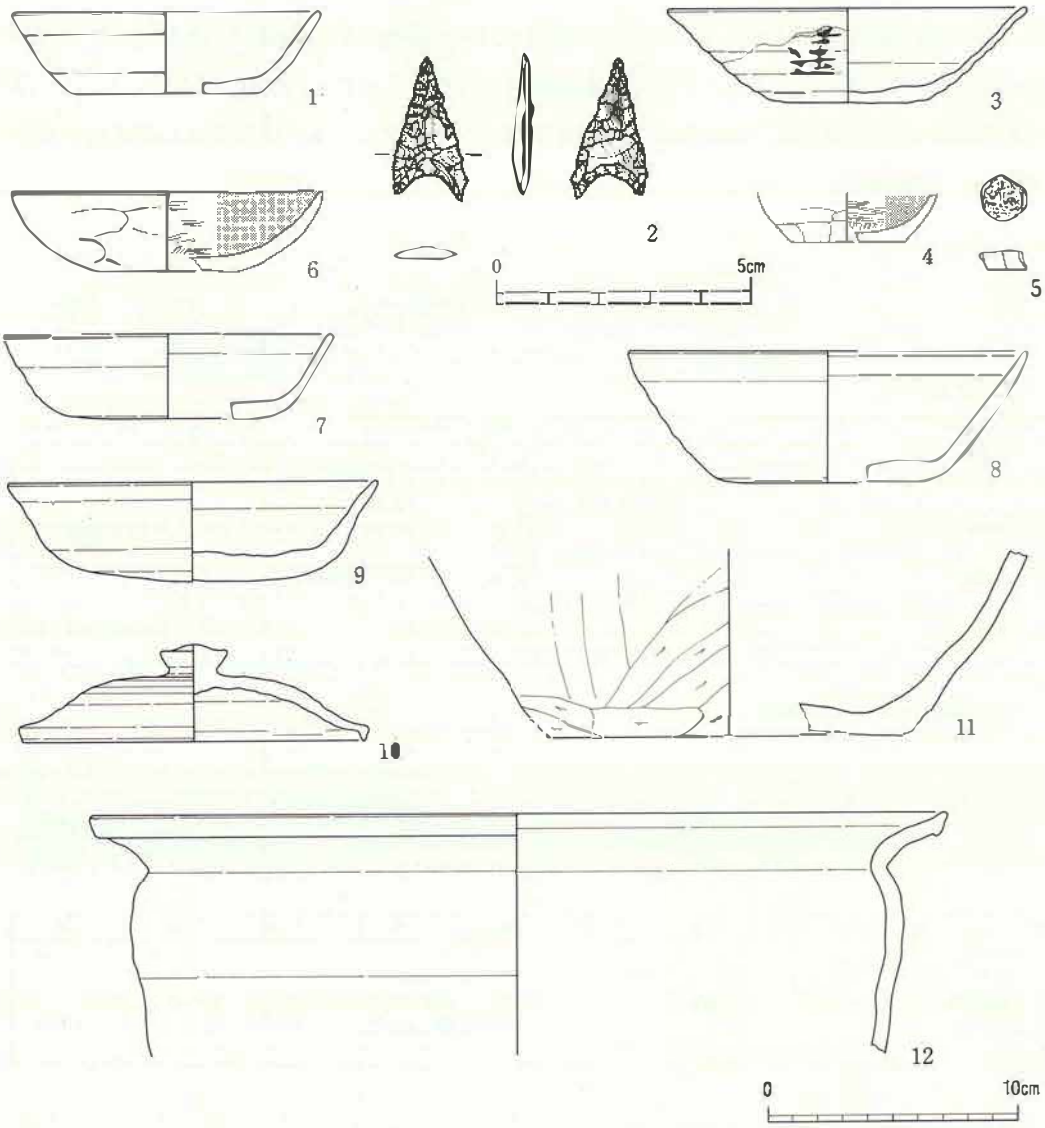
第７図　ＳＸ350道路跡変遷図

ＳＸ350Ｃ　重複関係からＳＫ303土壙より古く、ＳＢ347建物跡やＳＤ319・321溝跡より新しい。側溝は南側がＳＤ311溝跡、北側がＳＤ312溝跡である。路幅は両側溝の心心で計ると約2.7ｍである。断面形は舟底状を呈するが、Ａ期同様最深部がやや内側に寄っている。規模は上幅50～70cm、下幅15～25cm、深さ20～25cmを計る。埋土は、砂質気味の黒色シルトを基調とし、自然堆積した様相を示している。遺物は、両側溝から土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯（第８図１）・甕・瓶、赤焼き土器杯、丸瓦が出土しているほか、近世もしくはそれ以降の時期の陶器片がそれぞれ１点づつ出土している。

ＳＸ350Ｄ　重複関係からＳＤ320・321溝跡やＳＫ324土壙より古い。また、この時期までが整地層ａの上面で検出したものであるが、Ｄ期がＣ期に連続するものでないことが、他の遺溝との前後関係からわかる。側溝は南側がＳＤ323溝跡、北側がＳＤ322溝跡であるが、両側溝とも調査区の壁際で幅が著しく広くなり、壁が崩落したような様相を示す。したがって、路幅は側溝の残存状況が比較的良好な箇所で計ると心心で約6.8ｍである。両側溝の断面形はおおよそ逆台形を呈するが、底面の状況は凹凸が激しい。また、壁は幅が広くなる箇所で中頃に段を有するが、これが構築に際してのものか、あるいは壁の崩落などでできたものかは判断がつかなかった。規模は上幅120～220cm、下幅70～110cm、深さ25～30cmを計る。埋土は、南側側溝が褐灰色粘土質シルト、北側側溝が黒色シルトで、両者とも地山土を斑状及びブロック状に含んでいる。遺物は、南側側溝のＳＤ323溝跡から土師器杯（第８図６）・甕、須恵器杯（第８図７～９）・蓋（第８図10）・甕（第８図11・12）、平瓦、砥石が出土している。一方、北側側溝のＳＤ322溝跡からは、土師器杯（第８図４）・甕、須恵器杯（第８図３）・蓋・甕・瓶、赤焼き土器杯、丸瓦、円盤状製品（第８図５）、石鏃（第８図２）が出土している。

ＳＸ350Ｅ　地山上で検出したもので、整地層ａに覆われる。重複関係からＳＢ346建物跡やＳＥ332井戸跡より新しい。側溝は南側がＳＤ328溝跡、北側がＳＤ327溝跡であるが、前者は後続するＤ期のＳＤ323溝跡と大部分が重複するため、わずかに北側の壁の立ち上がり付近を確認したにすぎない。したがって、路幅は不明であるが、ＳＤ323溝跡と同位置にあったと仮定すると約８ｍを計る。以下残存状況の良好な北側側溝でみると、断面形は丸みのある底面から壁がゆるやかに立ち上がっており、大きくは逆台形とみなせるものである。規模は上幅150～220cm、下幅60～70cm、深さは地山面から約25cmを計る。埋土は、地山土をブロック状に多く含んだ黒色シルトである。遺物は、須恵器甕の破片が１点出土しているだけである。

ＳＸ350Ｆ　地山上で検出したもので、南側側溝は整地層ｂに覆われる。重複関係からＳＫ326土壙より古く、ＳＢ346建物跡やＳＫ331土壙より新しい。側溝は南側がＳＤ329溝跡、北側がＳＤ333溝跡であるが、両者とも平面形が直線的ではなく、壁の出入りも多い。したがって、側溝の中心線がつかみづらく、路幅については正確な数値とはいえないが約９ｍを計ることができ



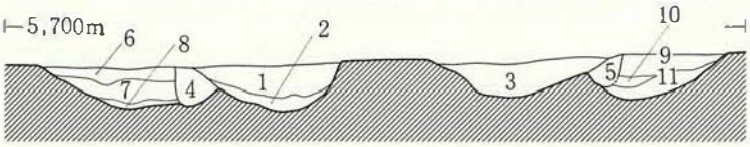
単位：cm　（　）は推定値

No	種別	器種	道構	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	図版No	備考
1	須恵器	杯	SD311	ロクロナデ、底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	(12.5)	(7.6)	3.3	6－2	
2	石鏃		SD322						8－1	
3	須恵器	杯	〃	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ロクロナデ	(14.4)	5.0	3.8	6－4	
4	土師器	〃	〃	体～底部 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理		(4.7)		6－3	
5	円盤状製品		〃						8－3	須恵器甕を転用
6	土師器	杯	SD323	体～底部 ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(12.6)	(5.6)	(3.2)	6－7	
7	須恵器	〃	〃	ロクロナデ、底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	(13.3)	(7.8)	(3.4)	6－9	
8	〃	〃	〃	〃 底部回転ヘラ切り ナデ	〃	(16.0)	(8.8)	(5.3)	6－8	
9	〃	〃	〃	〃 底部 回転ヘラ切り	〃	14.9	8.9	4.0	6－5	
10	〃	蓋	〃	〃 天井部 回転ヘラケズリ	〃	14.0		3.9	6－6	
11	〃	壺	〃	〃 体部下半 ヘラケズリ	〃 ―ナデ		(14.2)		6－11	
12	〃	〃	〃	〃	〃	(34.4)			6－10	

第８図　ＳＸ350道路跡出土建物

る。両側溝は断面形が逆台形を呈するが、底面では凹凸が激しい。規模は、南側側溝の南壁が後続する遺構に壊されていることから、北側側溝でみると上幅130～170cm、下幅80～100cm、深さ約20cmを計る。埋土は、南側側溝が灰色を基調とした砂質シルト、北側側溝が黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

ＳＸ350Ａ～Ｃ

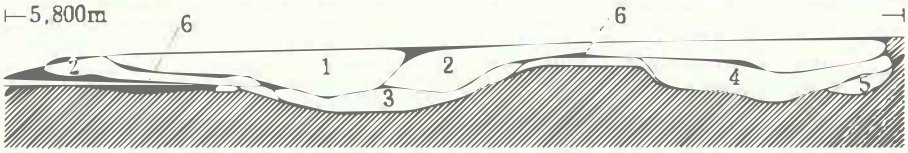


土層観察表

層位	時期	土色	土性	備考
ＳＤ301				
1	A	灰色(7.5Y4/1)	砂質シルト	しまりが弱い。
2	〃	〃 (10Y4/1)	〃	しまりが弱い。地山粒を含む。
ＳＤ302				
3	A	灰色(7.5Y4/1)	砂質シルト	しまりが弱い。
ＳＤ343				
4	B	灰色(7.5Y4/1)	砂質シルト	しまりが弱い。地山粒を含む。
ＳＤ344				
5	B	灰色(7.5Y4/1)	砂質シルト	しまりが弱い。地山粒を含む。

層位	時期	土色	土性	備考
ＳＤ311				
6	C	オリーブ黒色(5Y3/1)	シルト	
7	〃	黒色(5Y2/1)	〃	
8	〃	〃 (〃)	〃	やや砂質。地山粒を含む。
ＳＤ322				
9	C	オリーブ黒色(5Y3/1)	シルト	
10	〃	黒色(5Y2/1)	砂質シルト	
11	〃	〃 (〃)	シルト	やや砂質。地山粒を含む。

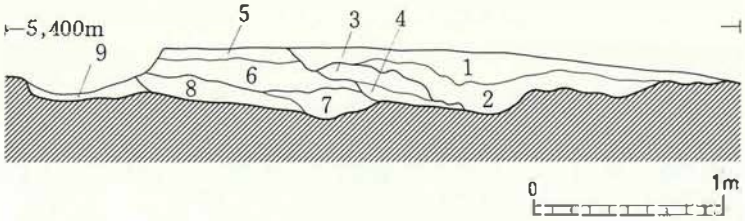
ＳＸ350Ｄ～Ｆ（北側側溝）



層位	土色	土性	備考
ＳＤ322			
1	黒色(2.5Y2/1)	シルト	地山土、炭化物を含む。
2	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	整地層a
ＳＤ327			
3	オリーブ黒色(5Y3/1)	シルト	地山ブロックを多く含む。

層位	土色	土性	備考
ＳＤ333			
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山土を多く含む。
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	黒褐色土を混入。
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山土に近似。

ＳＸ350Ｄ～Ｆ
（南側側溝）



土層観察表

層位	土色	土性	備考
ＳＤ323			
1	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	
2	灰白色(10YR8/2)	シルト	地山土を含む。
ＳＤ328			
3	褐灰色(10YR6/1)	シルト	
4	〃 (〃)	粘土質シルト	地山ブロックを含む。

層位	土色	土性	備考
5	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	整地層a
6	にぶい黄橙色(10YR7/3)	〃	整地層b
ＳＤ329			
7	灰白色(N7/)	砂質シルト	
8	明緑灰色(7.5GY8/1)	〃	土層全体が酸化
9	灰色(5Y4/1)	砂質シルト	基本層位 第Ⅳ層

第９図　ＳＸ350道路跡セクション図

(3) 溝 跡

〔ＳＤ306溝跡〕　調査区西側の第Ⅲ層上面で検出した東西方向に斜行する溝跡である。調査区北壁付近で湾曲して、さらに北側に延びる様相を示す。方向は、直線的な中央付近でみるとＥ－38°－Ｓである。規模は上幅50～60cm、下幅20～30cm、深さ５～10cmを計る。底面はやや凹凸があり、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は、灰色シルトの単層である。遺物は、土師器高台付杯・甕・瓶が出土しているが、いずれも破片である。

〔ＳＤ308溝跡〕　第Ⅲ層上面で検出した溝跡で、ＳＤ306溝跡の東側近くに位置する。東西方向に斜行するが、中央付近ではやや湾曲している。ＳＤ309溝跡と重複関係にあり、これより新しい。方向は、直線的な北側でみるとＥ－36°－Ｓである。規模は上幅30～50cm、下幅15～20cm、深さ10～15cmを計る。断面形は舟底状を呈する。埋土は、灰黄褐シルトの単層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶が出土している。

〔ＳＤ309溝跡〕　第Ⅲ層上面で検出した東西方向に斜行する溝跡で、ＳＤ306溝跡と同様に北側でわずかに湾曲しながら調査区外に延びる。ＳＤ308溝跡と重複関係にあり、これより古い。方向はＥ－35°－Ｓである。規模は上幅70～110cm、下幅25～50cm、深さ20～25cmを計る。断面形は舟底状を呈する。埋土は、灰黄褐色を基調としたシルトで、自然堆積した様相を示す。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶が出土している。

〔ＳＤ313～316・318溝跡〕　すべて調査区中央付近の地山上で検出した南北方向の小溝跡である。他の遺構と重複関係があるのはＳＤ318溝跡のみで、ＳＤ317溝跡とＳＸ349水田跡より新しい。これらの小溝跡を概観すると、方向はＮ－５°－Ｅの前後に集中する。規模は幅約15cm、深さ約５cmを計り、断面形は舟底状を呈する。埋土は、すべて褐灰色シルトの単層である。遺物は、ＳＤ318溝跡から土師器杯・甕の破片が出土している。

〔ＳＤ317溝跡〕　調査区中央付近の第Ⅱ層上面で検出した溝跡で、東西方向にゆるやかに蛇行しながら延びる。ＳＤ325溝跡と重複関係にあり、これより古い。方向は、前述の調査区西側検出の３条の溝跡に近く、直線的な南側でＥ－40°－Ｓである。規模は上幅20～30cm、下幅10～15cm、深さ約10cmを計る。断面形は舟底状を呈する。埋土は、黒褐色シルトの単層である。遺物は、土師器甕の破片がわずかながら出土している。

〔ＳＤ319溝跡〕　調査区東側の整地層ａの上面で検出した溝跡で、東西方向にゆるやかに蛇行する。ＳＸ350Ｃ道路跡と重複関係にあり、これより古い。方向はＥ－４°－Ｓである。規模は上幅50～60cm、下幅20～30cm、深さ約10cmを計る。底面は丸みをおび、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は、黒褐色を基調とした砂質気味のシルトである。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯、赤焼き土器杯、平瓦が出土している。

〔ＳＤ320溝跡〕　調査区東側の整地層ａの上面で検出した溝跡である。前述したＳＤ319溝跡

の北側に近接し、東西方向に湾曲しながら延びる。重複関係からＳＤ350D道路跡とＳＤ321溝跡より新しい。方向は、比較的直線的な中央付近でみるとＥ－10°－Ｓである。規模は上幅50～60cm、下幅20～25cm、深さ約10cmを計る。底面は丸味をおび、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は、黒褐色を基調とした砂質気味のシルトで、自然堆積した様相を示す。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕・瓶、赤焼き土器杯、丸瓦のほか、中世の無釉陶器擂鉢（第10図３）が出土している。

〔ＳＤ321溝跡〕　調査区東側の整地層ａ上面で検出した東西方向に延びる溝跡である。重複関係からＳＢ347建物跡やＳＸ350Ｃ道路跡より古く、ＳＸ350D道路跡より新しい。方向はＥ－４°－Ｓである。規模は上幅50～60cm、下幅20～30cm、深さ約15cmを計る。断面形は舟底状を呈する。埋土は、黒褐色シルトの単層である。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯が出土している。

〔ＳＤ325溝跡〕　調査区中央付近の第Ⅱ層上面で検出した東西方向に延びる溝跡である。重複関係からＳＤ317溝跡やＳＤ330溝跡より新しい。方向はＥ－５°－Ｓである。断面形は逆台形に近く、底面ではわずかに凹凸がみられる。規模は上幅70～150cm、下幅50～110cm、深さ10～15cmを計るが、北側の調査区外にかけて幅を広げながら徐々に浅くなっていく様相を示す。埋土は、黒褐色を基調としたシルト及び砂が自然堆積している。遺物は、土師器甕の破片がわずかながら出土している。

〔ＳＤ330溝跡〕　調査区中央付近の第Ⅳ層上面で検出した東西方向に蛇行する溝跡である。重複関係からＳＤ325溝跡やＳＫ304土壙より古い。方向は、比較的直線的な中央付近でみるとＥ－６°－Ｓである。規模は上幅35～50cm、下幅15～25cm、深さ約15cmを計る。断面形は舟底状を呈する。埋土は、粘土を含んだ黄灰色～黒褐色の砂で、自然堆積した様相を示す。遺物は、土師器甕と須恵器甕がわずかに出土している。

〔ＳＤ334溝跡〕　調査区中央付近の第Ⅳ層上面で検出した東西方向に延びる溝跡である。東端でわずかに南側に屈曲するような様相をみせながら途切れており、調査区内では約２ｍを確認したにすぎない。方向はＥ－17°－Ｓである。規模は上幅30～50cm、下幅25～30cm、深さ約10cmを計る。断面形は舟底状を呈する。埋土は、黄灰色シルトの単層で、同色の砂質シルトを混入している。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯（第10図４）・甕が出土している。

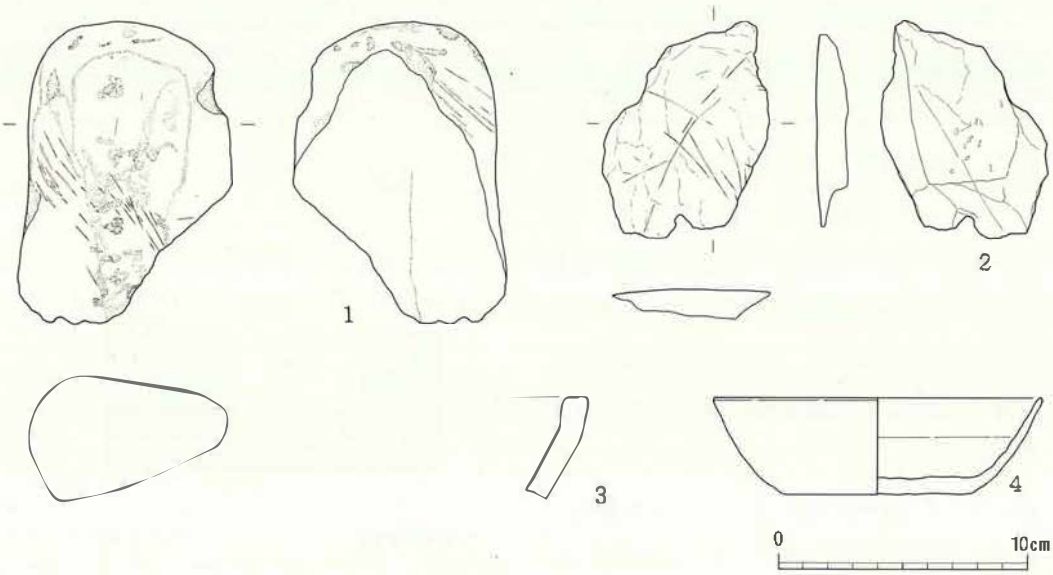
〔ＳＤ335溝跡〕　調査区南東部の地山上で検出した南北方向の溝跡で、整地層ａに覆われる。ＳＤ336溝跡と重複関係にあり、これより新しい。方向はＮ－５°－Ｅである。規模は上幅45～60cm、下幅15～25cm、深さ約15cmを計る。底面はやや凹凸があり、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は、黄灰色シルトの単層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

〔ＳＤ336溝跡〕　調査区南東部の地山土で検出した東西方向の溝跡である。重複関係からＳＤ

335溝跡より古く、ＳＢ348建物跡より新しい。方向はＥ－５°－Ｓである。規模は上幅45～80cm、下幅30～40cmを計り、深さは約５cmと浅い。底面は平坦に近いが凹凸がみられ、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は、地山ブロックを多く含む灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

〔ＳＤ338溝跡〕　調査区西側の地山上で検出した溝跡で、第Ⅲ層に覆われる。方向は、大きくみれば東西方向に斜行するものであるが、さほど一定性はみられない。また壁の出入りが激しく、底面も凹凸が多いことなどから自然の小河川の可能性が強い。埋土は、灰色～黄灰色の砂質シルトで、第Ⅲ層に類似する。遺物は、須恵器甕の破片がわずかに出土している。

〔ＳＤ339溝跡〕　調査区西側の地山上で検出した溝跡で、第Ⅲ層に覆われている。東西方向にゆるやかに蛇行するもので、第Ⅲ層上面で検出したＳＤ306～309溝跡の方向とほぼ一致する。東端付近で平面プランの重複がみられたことと断面観察から、大きく２時期の変遷があったと判断した。このうち、新しい時期のＳＤ339Ａについてみると、規模は上幅65～80cm、下幅30～40cm、深さ15～20cmを計る。底面は平坦に近く、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は、黄灰色を基調とした砂質気味のシルトで、自然堆積した様相を示す。遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕が出土している。



単位：cm　（　）は推定値

No.	種別	器種	遺構	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	図版No.	備考
1	砥石		ＳＤ323						8－13	
2	スレート片		ＳＤ306						8－11	片面に擦痕
3	無釉陶器	擂鉢	ＳＤ320	ヨコナデ	ヨコナデ				8－10	
4	須恵器	杯	ＳＤ334	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(13.2)	(7.8)	3.9	6－12	

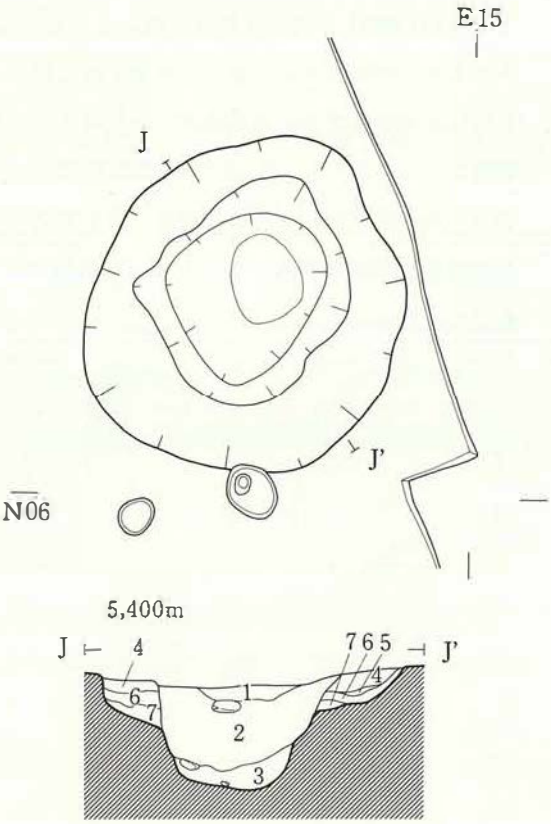
第10図　溝跡出土遺物

〔ＳＤ340溝跡〕　調査区西側の地山上で検出した溝跡で、第Ⅲ層に覆われる。南北方向に湾曲しながら延び、調査区中央付近でＳＤ341溝跡と重複して同一方向をとる。規模は、上幅60～70cm、下幅40～50cm、深さ約10cmを計る。断面形は舟底状を呈する。埋土は、灰色シルトの単層である。遺物は、土師器甕がわずかに出土している。

〔ＳＤ341溝跡〕　調査区西側の地山上で検出した南北方向の溝跡で、第Ⅲ層に覆われる。重複関係からＳＤ308・309・340溝跡より古い。方向はＮ－12°－Ｗである。規模は上幅20～30cm、下幅約10cm、深さ約20cmを計る。底面は丸味をおび、壁は比較的急に立ち上がり中頃で段を有する。埋土は、灰色のシルト～粘土質シルトが自然堆積した様相を示す。

(4)　井戸跡

〔ＳＥ332井戸跡〕　調査区東壁際の地山上で検出した井戸跡である。ＳＸ350Ｅ道路跡の北側側溝と重複関係にあり、これより古い。確認時から掘り方埋土と井戸側埋土が区別でき、井戸側施設の存在が予想されたが、検出はできなかった。井戸側の平面形は、かなり形がくずれているが大きくは長方形とみなせるもので、南北約１ｍ、東西約1.1ｍを計る。深さは地山面から約0.7ｍである。一方、掘り方は径約1.9ｍの円形で、井戸側の深さの中程までしか掘り込みは確認できない。埋土は井戸側内が３層に分けられるが、いずれも褐灰色を呈し、その違いは微妙な色調の変化や粘性の度合いだけである。したがって、一時的に埋め戻されたものと思われる。掘り方埋土は４層に分けられるが、いずれも地山ブロックを含んでいる。遺物は、掘り方内から土師器甕・杯、井戸側内から土師器杯・甕、須恵器杯（第13図１）・高台付杯（第13図２）・甕が出土している。このうち、土師器についてはロクロ調整と非ロクロ調整のものが混在している。また須恵器の杯は、底部が回転ヘラ切りで、その後無調整もしくは簡単なナデ調整を施し



土層観察表

層位	土　色	土　性	備　考
1	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト	井戸側内埋土。
2	〃　(　〃　)	シルト	〃
3	〃　(　〃　)	粘土質シルト	〃
4	〃　(10YR6/1)	シルト	掘方埋土。地山粒を含む。
5	にぶい黄橙色(10YR7/3)	〃	〃　地山ブロックを含む。
6	褐灰色(10YR4/1)	〃	〃　炭化物を含む。
7	にぶい黄橙色(10YR7/2)	〃	〃　地山ブロックを含む。

第11図　ＳＥ332井戸跡実測図

ているものが多い。

(5) 土　壙

〔ＳＫ304土壙〕　調査区中央付近の第Ⅱ層上面で検出した土壙である。ＳＤ325溝跡と重複関係にあり、これより新しい。平面形は略円形を呈し、径70～80cm、深さ約40cmを計る。埋土は灰色を基調とし、上層が粘土質シルト、下層が砂質シルトである。遺物は、土師器杯・甕、須恵器甕のほか、近世以降の染付の磁器の破片が出土している。

〔ＳＫ305土壙〕　調査区北東部の地山土で検出した土壙である。平面形はほぼ円形で、径2.3～2.4ｍを計る。断面形は擂鉢状を呈し、深さは約65cmである。埋土は細く分けられ、特に下層はレンズ状の堆積が顕著で、自然埋没と考えられる。また、上部の壁沿いに径約10cmの多くの小ピットが巡っており、あるいは上屋等の施設の柱穴の可能性も指摘できる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、赤焼き土器杯、丸・平瓦、砥石（第13図３）がある。このほか、中世の無釉陶器甕の破片が出土している。

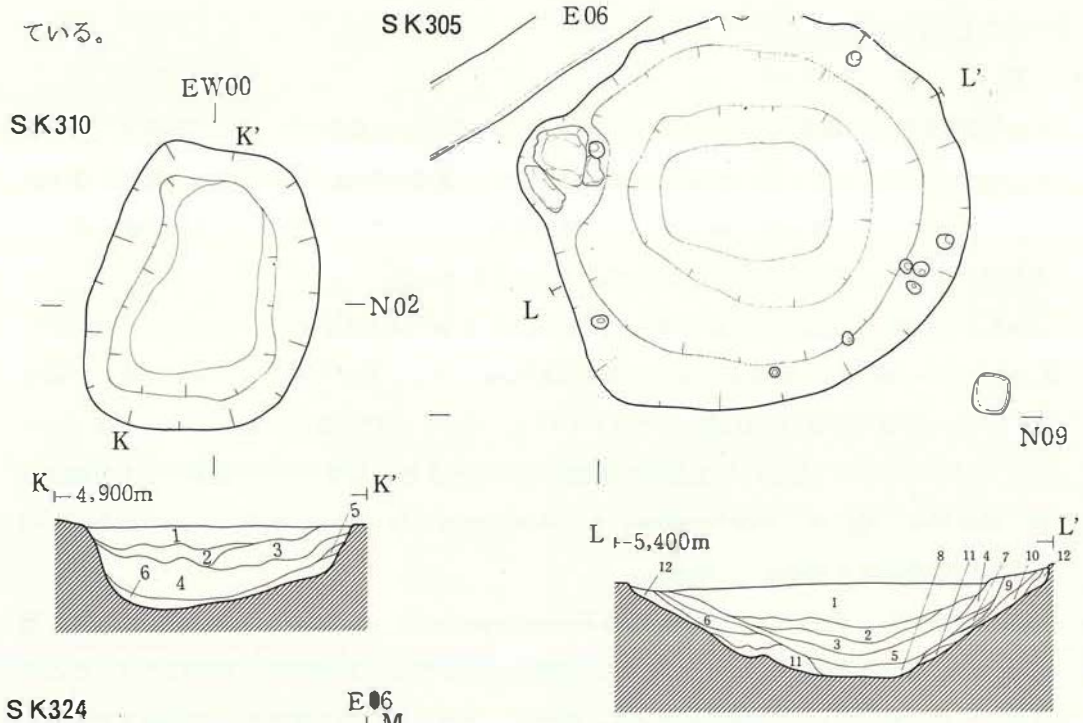
〔ＳＫ310土壙〕　調査区中央付近の第Ⅱ層上面で検出した土壙で、ＳＫ304土壙の東側に位置する。平面形は不整長方形で、長軸1.7ｍ、短軸1.3ｍを計る。断面形は、南側ほど深くなるがほぼ逆台形を呈し、深さは約50cmである。埋土は、上層が灰色粘土質シルトで地山ブロックを含む。下層は灰色粘土である。遺物は、土師器杯（第13図４）・甕、須恵器杯・甕・瓶（第13図５）、赤焼き土器杯・丸瓦が出土している。

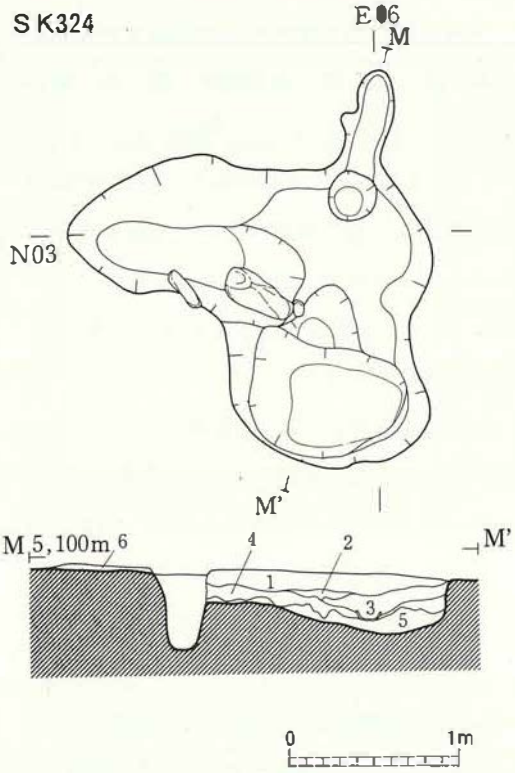
〔ＳＫ324土壙〕　調査区中央付近の東寄りで検出した土壙である。重複関係からＳＢ347建物跡より古く、ＳＸ350Ｄ道路跡より新しい。平面形は不整形で、特に西側において地形が傾斜する方向に溝状に張り出している。また底面にも凹凸があり、複数の土壙が連続して掘り込まれたような状況にもみえる。埋土は灰白色～褐灰色のシルトで、下層ほど地山土が多く含まれる。遺物は、土師器甕、須恵器杯（第13図８）・甕（第13図９）が出土している。

〔ＳＫ326土壙〕　調査区北東部で検出した土壙で、整地層ａに覆われる。重複関係からＳＢ346建物跡、ＳＸ350Ｆ道路跡、ＳＫ331土壙より新しい。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸1.15ｍ、短軸0.9ｍである。断面は、丸味のある底面から壁がそのままゆるやかに立ち上がり、深さは約20cmを計る。埋土は、地山土を含む黄灰色シルトであるが、底面付近に炭化物や焼土粒を含んだ黒色粘土質シルトが薄く堆積している。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・瓶（第13図６）が出土している。

〔ＳＫ331土壙〕　調査区北東部で検出した土壙である。重複関係からＳＢ350Ｆ道路跡より古く、ＳＢ346建物跡より新しい。平面形は不整形で、長軸約1.1ｍ、短軸約0.8ｍである。断面は、平坦な底面から壁が比較的急に立ち上がり、深さは約15cmを計る。埋土は、整地層ａに類似した黒褐色シルトの単層である。遺物は、土師器甕、須恵器高台付杯（第13図７）・甕が出土し

ている。





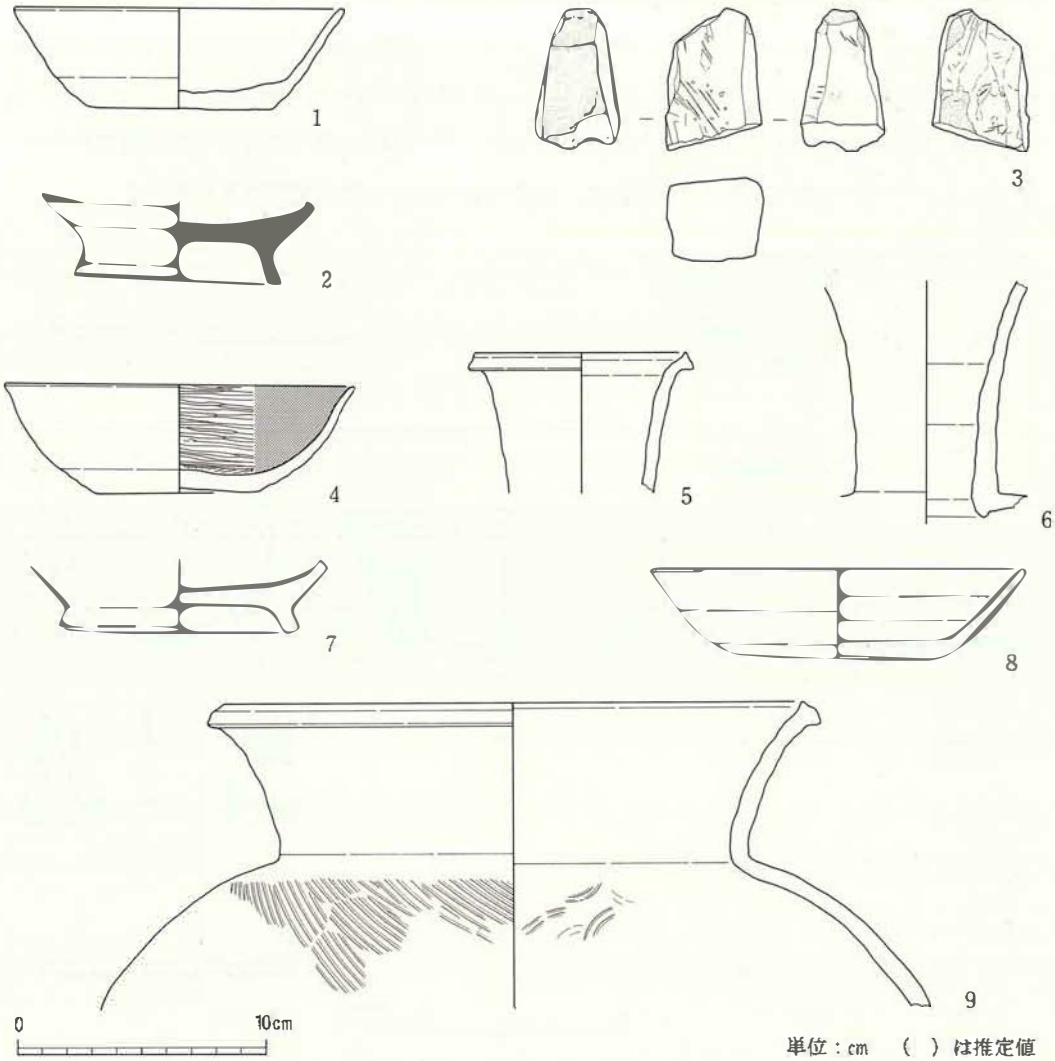
土層観察表

層位	土色	土性	備考
	SK310		
1	灰色(10Y4/1)	粘土質シルト	
2	〃 (〃)	〃	地山ブロックを含む。
3	〃 (7.5Y4/1)	〃	地山土と炭化物を含む。
4	〃 (10YR5/1)	粘土	同色の砂質土を混入。
5	明黄褐色(10YR6/6)	粘土質シルト	地山崩落土
6	灰色(7.5Y4/1)	粘土	
	SK324		
1	褐灰色(10YR6/1)	シルト	酸化鉄斑紋を含む。
2	〃 (〃)	〃	
3	〃 (10YR5/1)	粘土質シルト	
4	灰白色(10YR7/1)	シルト	地山粒を含む。
5	浅黄橙(10YR8/3)	〃	地山土と褐色砂質土が混入。
6	褐灰色(10YR6/1)	〃	
	SK305		
1	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	
2	オリーブ黒色(5Y3/1)	〃	黄灰色砂を混入。
3	〃 (10Y3/1)	粘土質シルト	〃
4	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	炭化物、焼土粒を含む。
5	〃 (7.5Y2/1)	粘土	植物遺体を含む。
6	〃 (2.5Y3/2)	シルト	
7	オリーブ黒色(5Y3/1)	砂質シルト	
8	灰色(5Y4/1)	粘土	地山粒を若干含む。
9	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山粒、炭化物を含む。
10	黄灰色(2.5Y4/1)	砂質シルト	〃
11	灰色(5Y4/1)	粘土質シルト	同色の砂質土を混入。
12	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	黒褐色土を混入。

第12図　SK305・310・324土壙実測図

(6) 水田跡

〔ＳＸ349水田跡〕　調査区中央付近の地山上で検出した水田跡である。畦畔は確認できなかったが、耕作範囲が周囲より一段低くなっており、長方形の平面形を形づくっている。方向は、

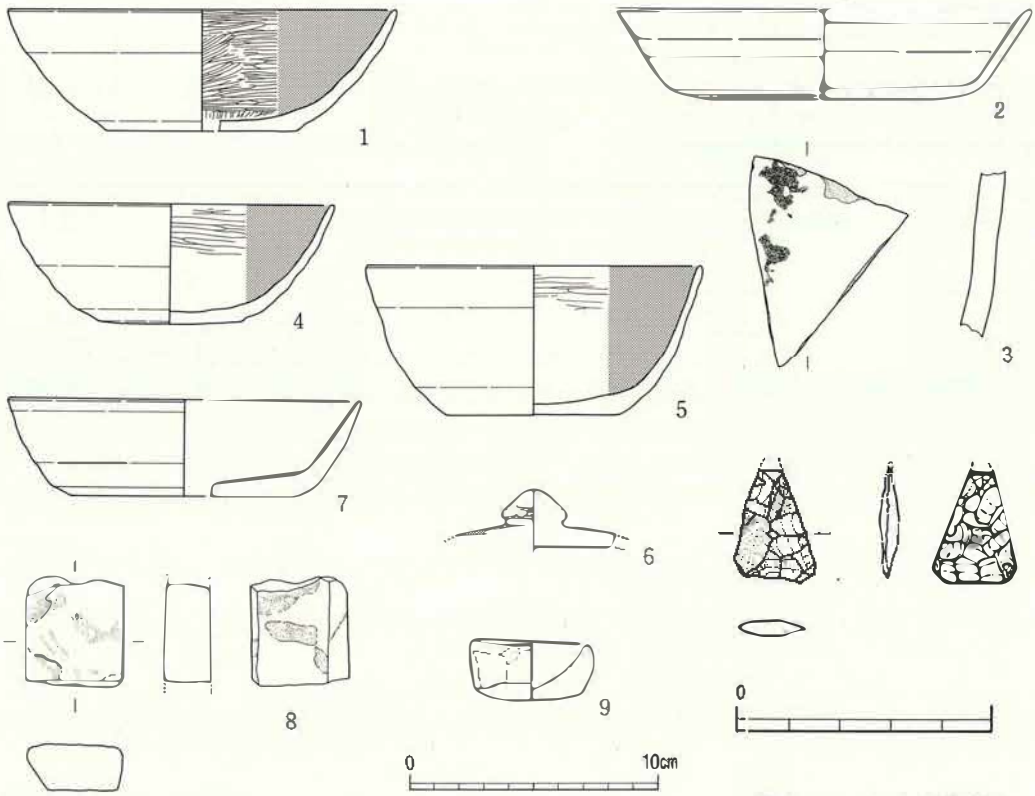


単位：cm　（　）は推定値

No.	種別	器種	遺構	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	図版No.	備考
1	須恵器	杯	ＳＥ332	ロクロナデ、底部 回転ヘラ切り	ロクロナデ	13.2	7.4	4.0	6－13	
2	〃	高台杯	〃	〃　〃	〃		8.3		6－14	
3	砥石		ＳＫ305						8－12	
4	土師器	杯	ＳＫ310	ロクロナデ、底部 回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	14.1	6.6	4.3	7－1	
5	須恵器	長頸瓶	〃	〃	ロクロナデ	(9.0)			7－2	
6	〃	〃	ＳＫ326	〃	〃				7－5	
7	〃	高台杯	ＳＫ331	〃　底部 回転ヘラ切り	〃		9.6		7－6	
8	〃	杯	ＳＫ324	〃 底部 回転ヘラ切り－ナデ	〃	15.0	8.0	3.6	7－3	
9	〃	甕	〃	〃　体部 平行叩き	〃　同心円文－ナデ	24.4			7－4	

第13図　井戸跡、土壙出土遺跡

発掘基準線にほぼ一致し、東西約6.5m、南北約5.5mを計る。調査区全体の地形は、東から西へゆるやかに傾斜するものであるが、水田跡が立地する付近のみ平坦地を形成している。さらに水田跡の底面では、むしろ北東側が低くなっている。したがって、南辺西寄りに取り付く溝状の箇所は、水口である可能性も考えられる。底面には細かな凹凸があり、この上面に第Ⅲ層の黄灰色シルトが直接載っていると判断した。しかし、調査区西壁付近では第Ⅲ層が砂質気味になり、灰白色火山灰を含んでいるのに対して、この付近ではそれがみられないことから、両者を区別することも可能ではあると思われる。なお、水田跡の範囲内で採取した土壌中からは、プラントオパール分析の結果（別稿参照）、イネ科植物が高い密度で検出されている。



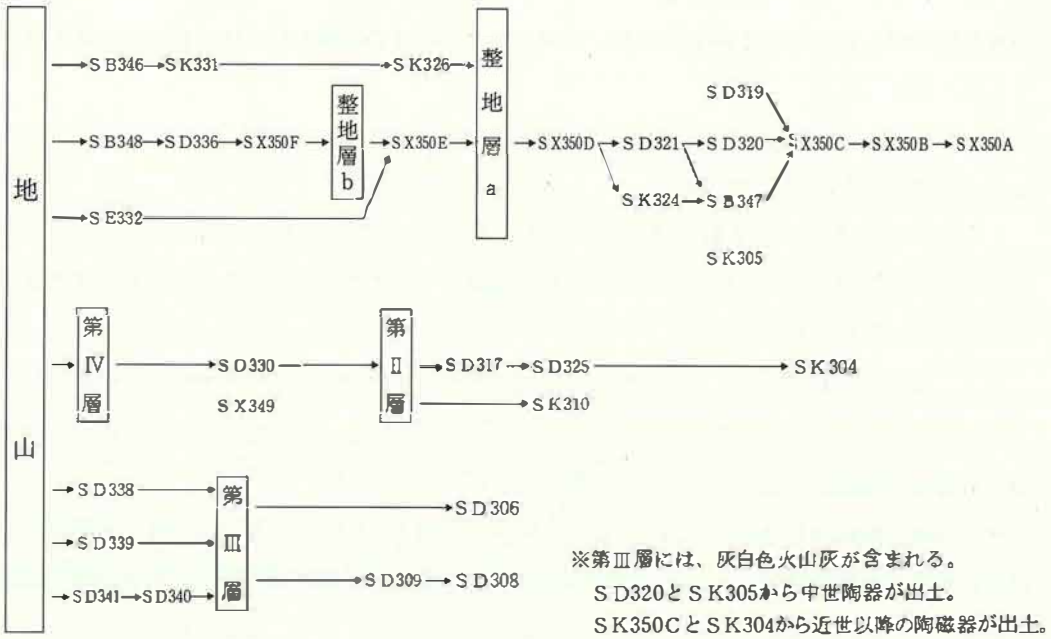
単位：cm　（　）は推定値

No.	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	図版No.	備考
1	土師器	杯	第1層	ロクロナデ，底部 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(15.6)	(7.7)	4.9	7－12	
2	須恵器	〃	〃	〃 底部 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(16.6)	(9.1)	3.6	7－13	
3	無釉陶器	甕	〃	ナデ	ナデ				8－9	外面に漆付着
4	土師器	杯	第Ⅲ層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.0)	5.7	4.8	7－9	
5	〃	〃	〃	〃 底部 手持ヘラケズリ	〃	(13.6)	7.0	6.0	7－11	
6	〃	蓋	〃	ヘラミガキ・黒色処理	〃				7－10	
7	須恵器	杯	整地層a	ロクロナデ，底部 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(14.2)	(9.1)	3.9	7－8	
8	砥石		第Ⅲ層						8－13	
9	手づくね土器		整地層a	ナデ	ナデ	5.0	4.3	2.3	7－7	
10	石鏃		〃						8－2	

第14図　堆積土、整地層a出土遺物

V まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡、道路跡、溝跡、井戸跡、水田跡等を検出した。これらの遺構は、相互に重複関係をもち、また検出面も異なっているものが多い。下表では主要な遺構について、基本層位との関係等もふまえて、新旧関係を古い順に整理した。



はじめに、遺構の年代について検討することにする。しかしながら、各遺構とも出土遺物が僅少で、年代決定の決め手になるような資料が非常に限られているため、ここでは大まかな年代をあげるだけにとどまらざるを得ない。

まず、整地層aに覆われる遺構のうちで古い時期に位置づけているSE332井戸跡についてみると、出土遺物にはロクロ調整と非ロクロ調整の土師器が混在している。製作の際にロクロを使用するのは8世紀末か、あるいは平安時代に入ってからと考えられており、これに奈良時代の土師器の特徴である非ロクロ調整のものが混在していることから、この遺構の年代は奈良時代からさして離れない平安時代前半頃とみて差し障りないと思われる。また、10世紀前半以降に出現するとされている赤焼き土器（註①）を含まないことや、須恵器の底部の切り離し技法が回転ヘラ切りのものが多いことなども、この年代に位置づける一つの根拠になり得ると思われる。このほか、SE332井戸跡を挟むように南北に位置するSB346建物跡とSB348建物跡も、新旧関係や位置および方向等から、同時に存在したかまでは言えないものの、おそらくこの時期におさまるものと推定した。

次に、整地層aやそれに続くSX350D道路跡等の遺構については、出土遺物に赤焼き土器を

含んでいることから10世紀前半以降の、平安時代内での変遷であると理解したい。

さらに、後続するＳＤ320溝跡とＳＫ305土壙からは中世の無釉陶器が出土しており、埋土が前者に非常に類似するＳＤ319・321溝跡や重複関係からこの時期に位置づけられるＳＢ347建物跡と合わせて、おおむね中世に属するものと考えられる。ちなみに、本調査区の東側の丘陵部には土塁状の高まりや平場状の地形がみられ、中世におけるこの地域の領主であった八幡氏の一族の居館跡ともいわれている（註②）。本調査区での中世の遺構も、これに何らかの関係があるものと考えられる。

ＳＸ350Ｃ以降の道路跡は、近世もしくはそれ以降の時期の陶磁器が出土していることから、近世以降の変遷であると判断した。

このほかの遺構では、ＳＸ349水田跡に10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰を含む第Ⅲ層か、あるいはそれに非常に近似した土層が堆積していることから、火山灰降下前後の時期があたえられると思われる。

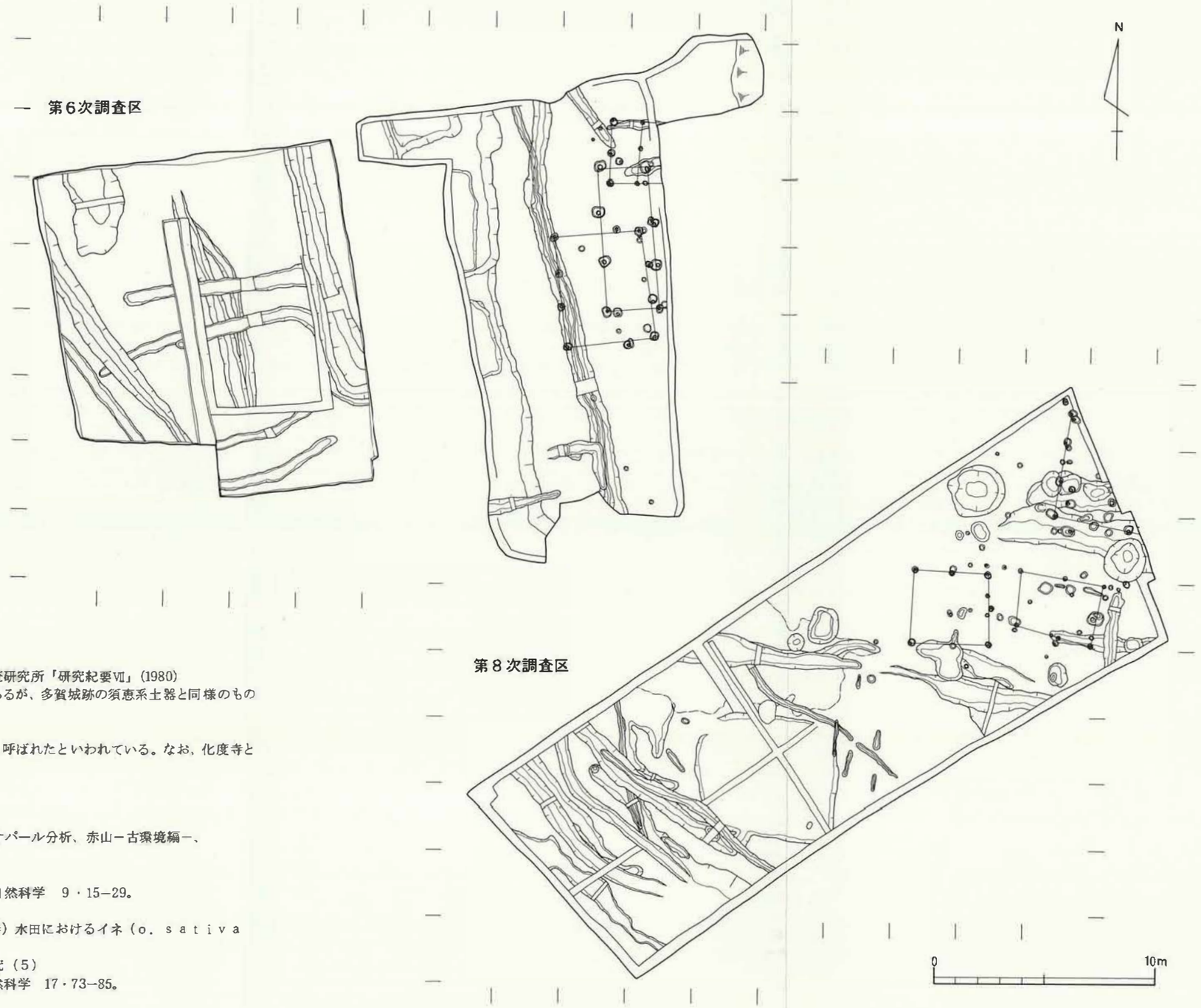
また、調査区中央付近で第Ⅱ層を挟んで検出したＳＤ325溝跡とＳＤ330溝跡は、それぞれＳＸ350ＤとＳＸ350Ｆの道路跡の南側側溝の延長上に同じ方向をとって延びている。このことから、道路跡の側溝と一連のものである可能性がある。

次に遺溝の構成や立地等について、本調査区の北西側で昭和61年に実施した高崎遺跡第６次調査Ｄ地区での調査成果と合わせてみてみたい（第15図参照）。第６次調査では、東側から西側にかけてゆるやかに傾斜する地形上に各遺構が立地している。まず、調査区東側では３棟の掘立柱建物跡を検出している。さらに、すぐ西側では小区画の畦畔状遺構を検出しており、これを水田跡と考えている。年代は、これらを覆う堆積土中に灰白色火山灰が含まれることから、平安時代前半頃に機能していたものと考えられる。また水田跡の西側においては、９条の溝跡が相互に重複した状況で検出されている。年代については、一番新しい時期のものが近世に属する以外は、すべて灰白色火山灰降下前後に位置づけられている。なお、これらの溝跡は今回の調査区西側で検出した溝跡と、埋土や規模および方向が非常に類似したものである。

このように、第６次調査での遺構の分布状況は、本調査区でのあり方とほぼ同様の様相を示すとみてよい。これらのことから、この付近での平安時代における土地利用の状況を概観すると、まず丘陵西側斜面の端部では掘立柱建物跡や井戸跡等からなる居住域が形成されていたものと思われる。つづいて居住域の周縁には小区画の水田がつくられ、その外側には溝跡が多くの変遷をもちながら、地形に沿うように巡っていたものと推定される。なお、本調査区の西側に位置する現在の水田地域で行なった試掘調査では、スクモ層等によって形成された低湿地が広い範囲で確認でき、これに流れ込む自然河川と思われる溝跡が多く検出されている。

以上、今回の調査成果を概略的にまとめたが、特に遺構の年代などかなり大まかな検討にな

らざるを得なかった。しかし今後の調査しだいでは、本調査区付近が今まで部分的にしか知り得なかった国府多賀城の周辺地域での集落のあり方を、全体的に解明する手がかりを与える地域になる可能性もある。そのための資料の蓄積と考えるならば、今回の調査の成果は大変貴重なものであったといえる。



第15図　第6・8次調査区　遺構配置図

【註】

註①　白鳥良一　『多賀城跡出土土器の変遷』　宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要Ⅶ」(1980)
本報告書中で赤焼き土器としたものは、細部で若干の違いはあるが、多賀城跡の須恵系土器と同様のものとみている。

註②　多賀城市　「多賀城市史　第5巻　歴史資料（一）」(1985)
平姓八幡氏系譜の中に高崎彦三郎盛忠の名がみえ、化度寺殿と呼ばれたといわれている。なお、化度寺という寺院は本調査区の南東側に現存する。

〔Ⅵの参考文献〕

杉山真二・藤原宏志　1987、川口市赤山陣屋跡におけるプラント・オパール分析、赤山ー古環境編ー、川口市遺跡調査会報告　第10集、281−298。
藤原宏志　1976、プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）
ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー、考古学と自然科学　9・15−29。
藤原宏志　1979、プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）
ー福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時）水田におけるイネ（o. sativa L.）生産総量の推定ー、考古学と自然科学　12・29−41。
藤原宏志・杉山真二　1984、プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）
ープラント・オパール分析による水田址の探査ー、考古学と自然科学　17・73−85。

Ⅵ　高崎遺跡第８次調査におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

１．はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、高崎遺跡第８次調査における稲作跡の探査を試みたものである。

２．試料

試料は、遺跡の調査担当者によって採取され、当研究所に送付されたものである。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976)」をもとに、次の手順で行った。

(1)　試料土の絶乾（105°Ｃ・24時間)、仮比重測定

(2)　試料土約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μｍ、約0.02ｇ）

　　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

(3)　電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)　超音波による分散（300W・42KHZ・10分間）

(5)　沈底法による微粒子（20μｍ以下）除去、乾燥

(6)　封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(7)　検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラントオパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重単位：10ｇをかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ，タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ29.4（種実重は1.03)、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987)。

４．分析結果

プラント・オパール分析の結果を表１および図１、図２に示す。なお、稲作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやガヤなどが含まれる)、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な５分類群に限定した。

5．考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、稲作の可能性について検討を行った。

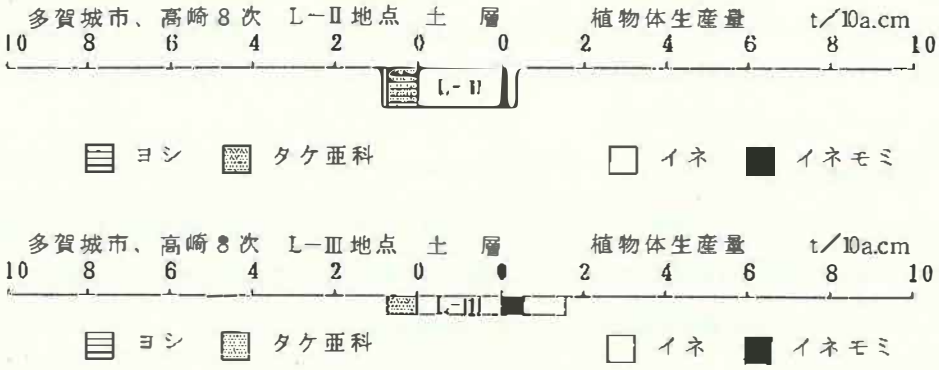
分析を行ったのは、第Ⅱ層、第Ⅲ層の２点である。その結果、２点ともイネのプラント・オパールが検出された。このうち第Ⅲ層では、プラント・オパール密度が3,800個／ｇと比較的高い値であることから、同層で稲作が行われていた可能性が考えられる。また、第Ⅱ層については密度が900個／ｇと低いことから、稲作が行われていた可能性はあるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も考えられる。

表１　プラント・オパール分析結果

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ（籾総量） 個／g	t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
L-Ⅱ	--	10	1.33	900	1.13	900	11,600	3,800	0
L-Ⅲ	--	5	1.41	3,800	2.73	0	10,500	7,600	0

図１　イネのプラント・オパール検出状況

図２　おもな植物の推定生産量と変遷



調査区全景
（西側より）

調査区東半部
（南側より）

調査区西半部
（東側より）

図版 1

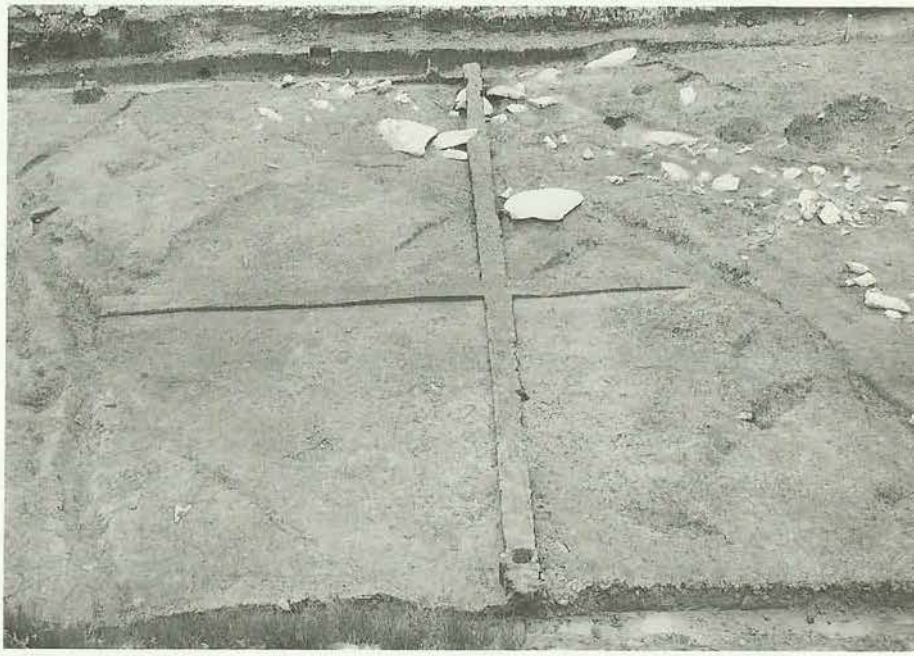
ＳＸ350Ａ道路跡
（東側より）

ＳＸ350Ａ～Ｃ道路跡
（東側より）

調査区東半部
上層検出遺構
（南側より）

図版２

調査区中央付近
検出遺構
（東側より）



調査区中央付近
水田跡
（南側より）

調査区西半部
検出遺構
（南側より）

図 版 3

ＳＢ346建物跡（南側より）

左に同じ

ＳＢ347建物跡（南側より）

左に同じ

ＳＢ348建物跡（北側より）

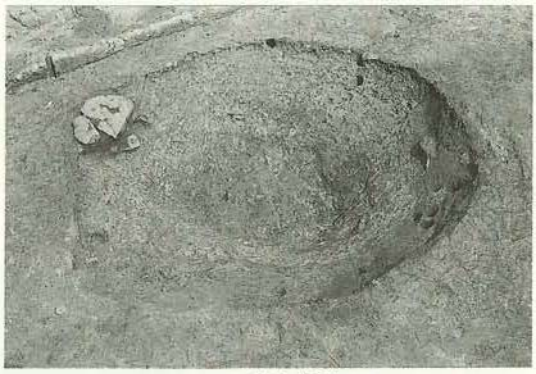
ＳＥ332井戸跡土層堆積状況

ＳＥ332井戸跡掘り込み状況

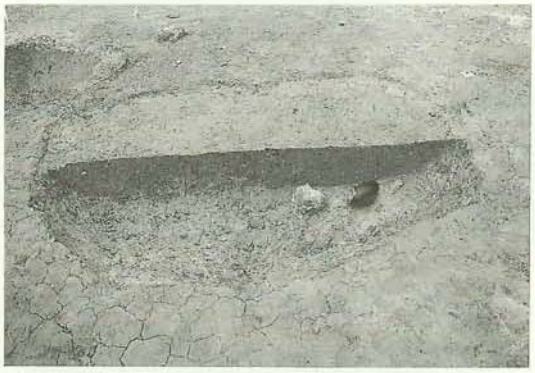
ＳＥ332井戸跡完掘状況

図 版 4

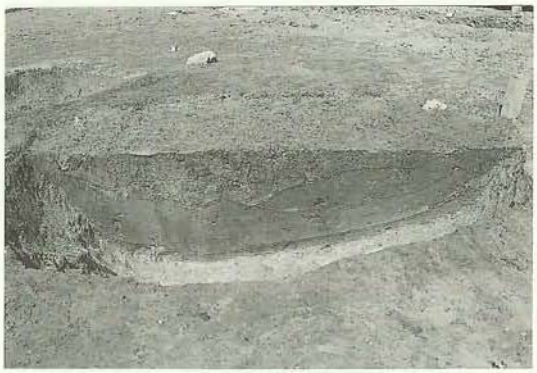
ＳＫ305土壙土層堆積状況



ＳＫ305土壙完掘状況



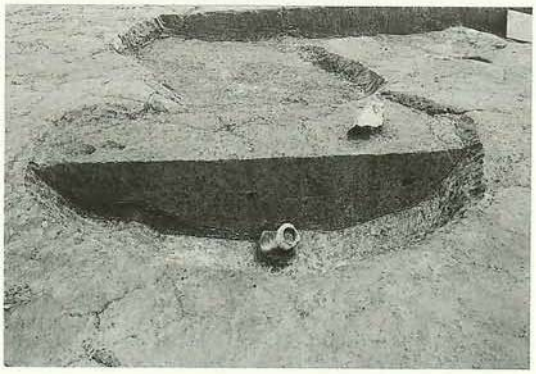
ＳＫ310土壙遺物出土状況



ＳＫ310土壙土層堆積状況

ＳＫ310土壙完掘状況

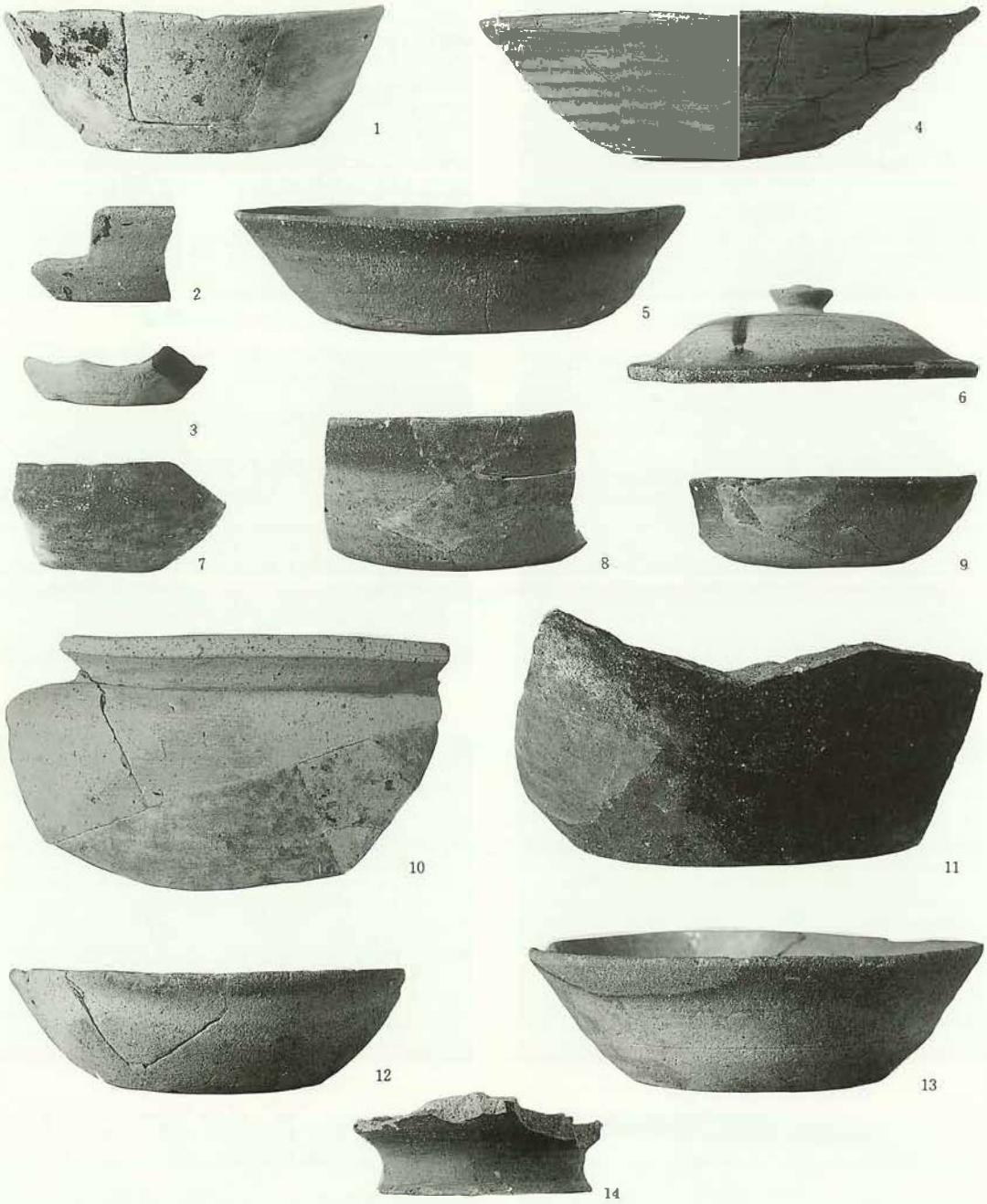
ＳＫ324土壙完掘状況



ＳＫ326土壙土層堆積状況

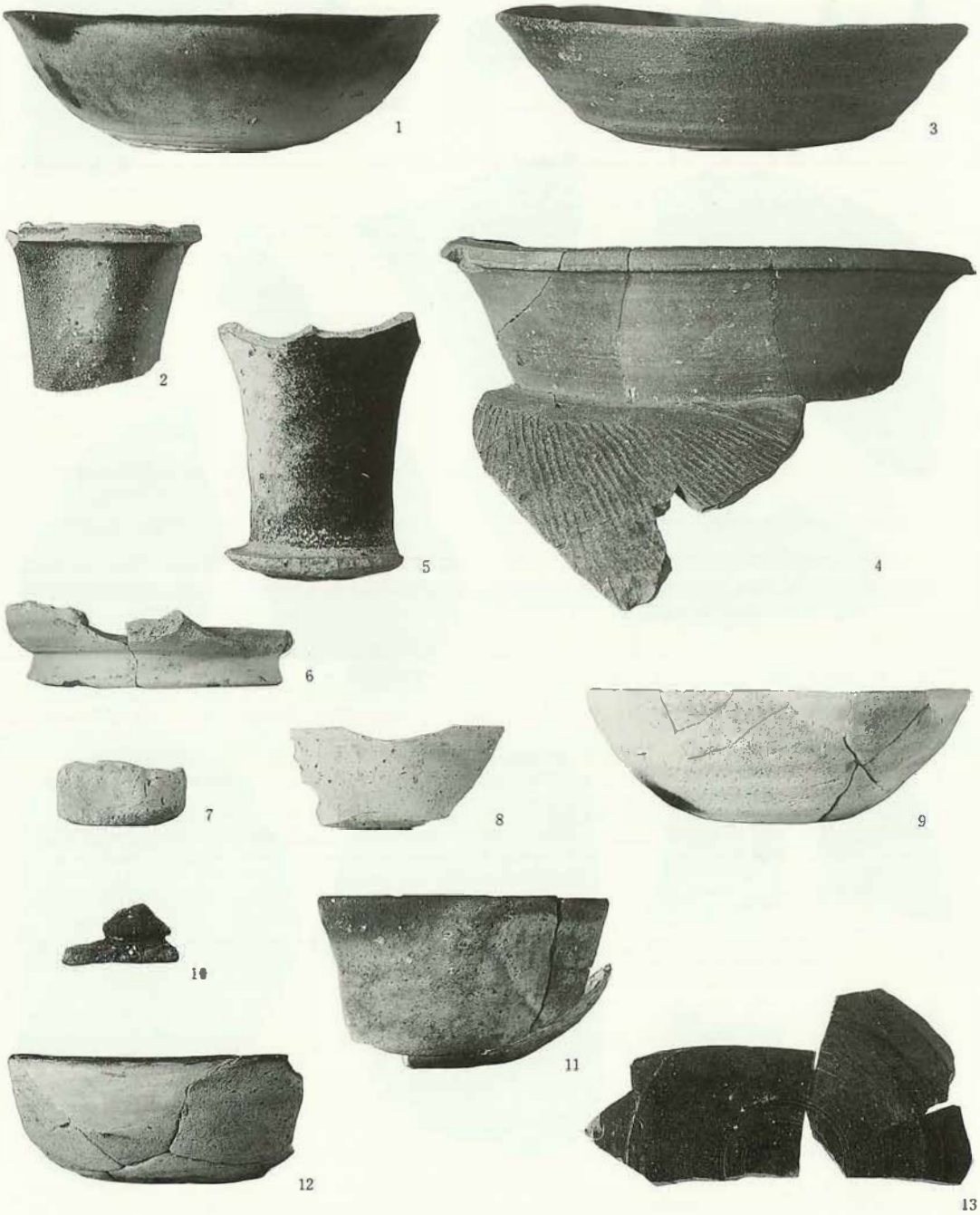
調　査　風　景

図 版 5



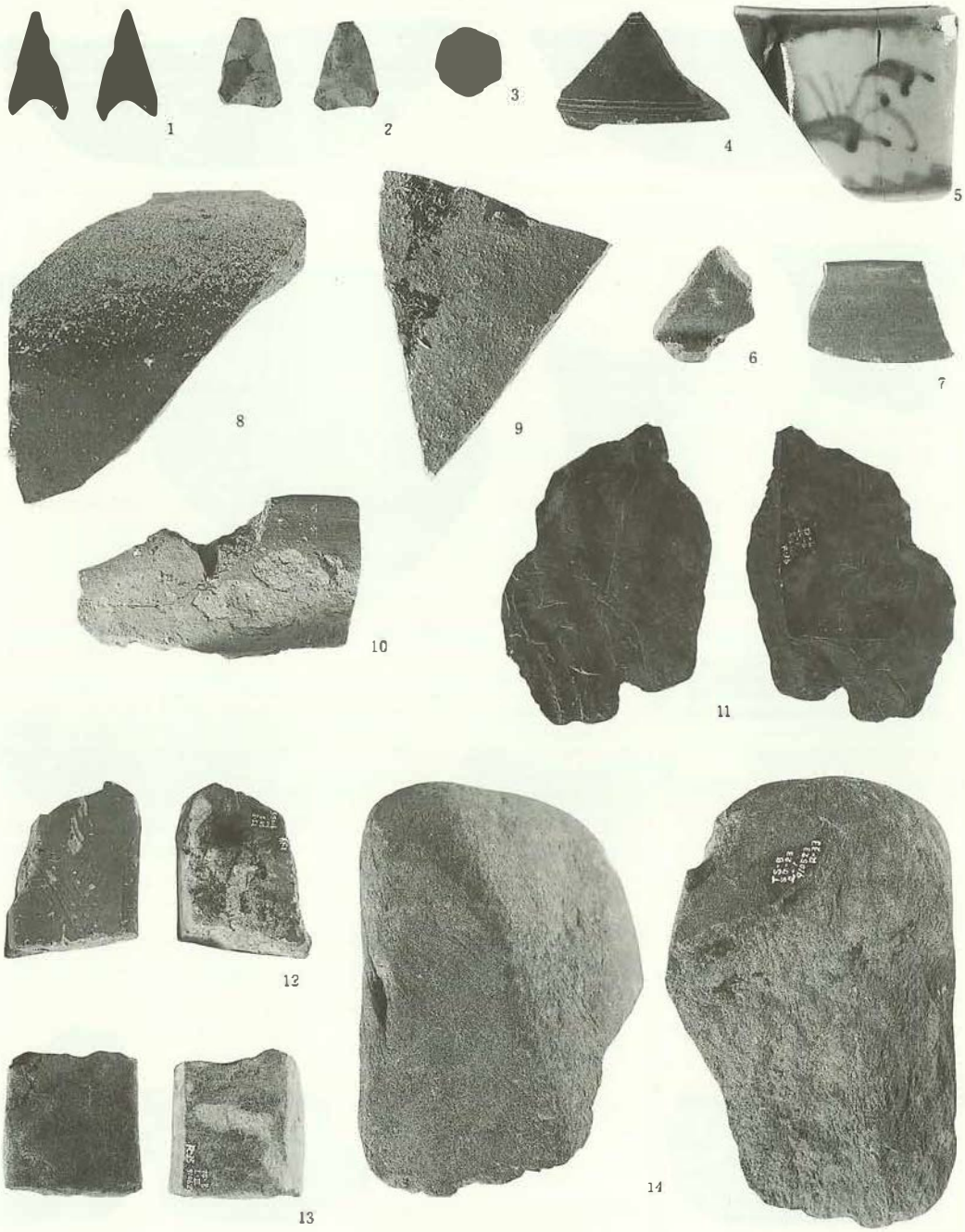
1.須恵器杯	SB347	第5図1	6.須恵器蓋	SD323	第8図10	11.須恵器甕	SD323	第8図11
2. 〃 〃	SD311	第8図1	7.土師器杯	〃	〃 6	12. 〃 杯	SD334	第10図4
3.土師器〃	SD322	〃 3	8.須恵器〃	〃	〃 8	13. 〃 〃	SE332	第13図1
4.須恵器〃	〃	〃 4	9. 〃 〃	〃	〃 7	14. 〃高台杯	〃	〃 2
5. 〃 〃	SD323	〃 9	10. 〃 甕	〃	〃 12			

図版6　出　土　遺　物



1.土師器杯	SK310	第13図4	6.須恵器高台杯	SK331	第13図7	11.土師器杯	第Ⅲ層	第14図5
2.須恵器瓶	〃	〃 5	7.手づくね土器	整地層a	第14図9	12. 〃 〃	第Ⅰ層	〃 1
3. 〃 杯	SK324	〃 8	8.須恵器 杯	〃	〃 7	13.須恵器〃	〃	〃 2
4. 〃 甕	〃	〃 9	9.土師器 〃	第Ⅲ層	〃 4			
5. 〃 瓶	SK326	〃 6	10. 〃 蓋	〃	〃 6			

図版7　出　土　遺　物



1.石　　鏃	SD322	第8図2	6.施釉陶器碗	SD301		11.スレート片	SD306	第10図2
2.　〃　　整地層a		第14図10	7.　〃　〃	SD312		12.砥　　石	SK305	第13図3
3.円盤状製品	SD322	第8図5	8.無釉陶器甕	SK305		13.　〃	第Ⅲ層	第14図8
4.陶器碗	SD311		9.　〃　〃	第Ⅰ層	第14図3	14.　〃	SD323	第10図1
5.瓦器　〃	SK304		10.　〃　播鉢	SD320	第10図3			

図版8　出　土　遺　物

多賀城市文化財調査報告書第31集

高　崎　遺　跡

第８次発掘調査報告書

平成４年３月31日発行

編　集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
発　行　多賀城市中央二丁目27番１号
　　電　話　(022) 368－０１３４
印　刷　富士印刷有限会社
　　多賀城市笠神五丁目15番28号
　　電　話　(022) 367－０１５７